
太一君は恋を求める

かるびーえーる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太一君は恋を求める

【Nコード】

N2021D

【作者名】

かるびーえーる

【あらすじ】

彼女居ない暦20年……そんな太一君がある日大学食堂で不思議ちゃんと出逢う……

第1話『不思議ちゃんは俺のストライクゾーンだぜ！！！ひゃっほう！！！』

頑張ります（＾・＾）

第1話『不思議ちゃん俺のストライクゾーンだぜ!!!!ひゃっほう!!!!』

「ああ……一度でいいから萌えるような恋をしてみたいよね……ねえ？そう思わない？太一？」

「ああ……一度でいいから燃えるようなお前をみてみたいよなあ……」

「あんた怖いよ!?(汗)ちょっとあんたシャレになんないんですけどお!?(汗)」

「花火みたいできつときれいだろーな♪あはははっ」

「『あはははっ』じゃないですよ!?(汗)デビルマンかあんた!?(汗)」

「ナンドトコノヤロウ!」

バキッ

「げびゅっ!!!」

俺は皆瀬^{みなせ}太一。某大学に通っているしがないピーポーだ。そして、今大学食堂と一緒にメシを食っている情けないこの男は斉藤^{さいとう}和也。恥ずかしい話だが現在、俺達彼女募集中だ。……しかし、コイツと一緒にしないでくれ。病気になるそうだ。

「なんで僕、殴られたんだろう……(泣)」

「まあ、それがお前の宿命だ」

「そんな宿命やだっ！！！！！！（泣）」

「……この男は……」

「なあ．．．ところでよ、太一。お前もうそのラーメン食わないの？俺腹減ってるんだ。くれよ、それ」

「ああ・・・いいぜ・・・この俺の体液が入り混じったラーメンをお前に謙譲してやるよ。ありがたく思えよ？」

「食う気なくなつたよ!!! 氣持悪い!!!」

「気持悪いのはお前の顔だ！……ばーか！……」

「本当にひどいよ!!! あんた!!!」

はあ．．．本当に毎日こいつの相手をしてると疲れる．．．．．
 はあ．．．斉藤じゃあないが俺も俺の心を癒してくれる彼女が欲し
 いなあ．．．．．

「あ、そうだ！おい、太一！お前の妹紹介してくれよお！僕のスマイルで一撃で落としちゃうからさあ♪」

「刺すぞ、てめえ」

「すみませんでしたあああああ……！！！！！！！！！！」（泣）

はあ・・・ほんとに疲れる・・・

「・・・・・・・・腹減ったなあ・・・・・・・・おい、お前のミンチカツよこせよ」

パクッ

「ってあああああああああ！！！！！！！！！！僕が楽しみに取
っておいだミンチカツがああああ~~~~
~~~~~~~~！！！！！！！！！！お前~~~~！！！！返せよおおお  
おお！！！！！！僕のミンチカツ~~~~  
！！！！！！っていうか！！！！！！まだあなたのラーメン残ってんじゃ  
はないですか！？それ、食べよ！！！！なん  
で僕のミンチカツ食うの！？」

「うんめえええ♪舌がとろけるう~~~~最高~~~~♪」

「うあああああん！！！！！！あんた、最低だ~~~~！！！！！！  
(泣)」

泣きながらあの馬鹿(斉藤)はどこかへ走り去ってしまった。あ  
ストレス解消♪

さて、残りのラーメンでも食うか。

「あの？横の席いいですか？」

「ん？」

俺がメシを食っていると誰かが声をかけてきた……うお！かわい子ちゃん！？

「あ……ああ、いいよ」

「ありがとうございます」

……しかし、なんでだ？なんで、わざわざ俺の横に？というのも、大学食堂は今ガラガラだ。  
なのにわざわざ俺の横に来るこの子……いや、嬉しいんだが。うん、ボクトツテモウレシイ。

「……………」

「……………」

……しかし、物静かな子だなあ……  
髪は長くて黒い髪形で青いリボンをつけている……  
顔立ちもいいし……胸大きいし……しかし……何  
処と無く不思議ちゃん？みたいなオーラを  
かもし出している女の子だった。

「……………」

「……………」

チラッと横目で彼女を見るとちょうどパンの包装を開けている途中だった……

「~~~~~」

「……………」

……………開かない。

「~~~~~」

「……………」

……………けど、開かない。

「……………あの……………」

「ん？どうしたの？」

「すみませんがこれ開けてくれませんか？」

「あ……………ああ、いいよ。貸してみそ」

俺は彼女からパンの入った包装を受け取りなんとなく開けてやる。

「どうぞ」

「……………ありがとうございます」

……………彼女はとっても嬉しそうだった……………やべえ……………  
かわいいよw

「……お礼に私、脱ぎます」

ぬきぬき

「ぶつ――！！！！！！！！！！ちよつとお！何  
やってんのぉ！？君いいいいいい！！？」

「え……？脱いでるんですけど？」

「脱がなくていいから!!!!!!」

「.....残念です」

……何が残念なのか分からないが……（汗）

「……では、私はナニをすればいいんでしょうか？……  
もっとひどいことですか？」

「いや！……いや！……もう、何もなくていいからね！？（汗）  
 つていうか僕、そんなド外道さんじゃないからね！？」

「.....残念です」

だから、ナニが残念なんだろう……（汗）

「はあ・・・じゃあ、とりあえず君の名前教えてくれる？ちなみに俺の名前は皆瀬太一、君は？」

「はい……霜月海しもつきうみです。そして、真に図々しいかもしれないんですけど……」

「ん？何？」

「…………私のお友達になってくださいませんか？」

「え？」

「……………ダメ……………ですか？」

悲しそうな目で俺を見つめる霜月さん。

「もち、いいですよ。俺なんかでよければ」

「……………よかったです」

彼女は嬉しそうな目で俺を見つめる……………普通にかわいい……………

「お礼といつてはなんですが……………」

ゴソゴソ……………

彼女は自分のポッケに手を入れ何かを取り出した……………洗剤？

「どうぞ」

「あ…………ああ、ありがとう」

「私はこれから講義がありますので、ではこれで」

「ああ・・・またな」

・・・

かわいいが・・・なんかちょっと変わった子だなと思った。

第1話『不思議ちゃん俺のストライクゾーンだぜ!!! ひゃっほう!!!』

.....

まったくこの後の展開を考えていないんですが次回も頑張ります。

良かったら感想下さいね〜

第2話『寒い時期はおでんがうまい』（前書き）

おでんもいいけどお鍋もいいものです。

## 第2話『寒い時期はおでんがうまい』

「・・・はあ、コタツって暖かいけど体だけでなく心も暖かくしてくれえるよね？太一？」

「・・・ああ、コタツって暖かくてついお前に対して殺気が芽生えちゃうよな」

「なんでだよ！？（汗）こわいよ！？あんた！？何する気なの！？」

「もうっ」わかってるくせにいっ」

「笑顔で言うことじゃないよね！？その台詞！？」

マフラーと手袋が恋しくなってきた今日この頃、太一です。

今はこのアホ（斉藤）が俺の家に入り浸っている。んで真に図々しいことに俺様のコタツでのうのうと居座っている。・・・正直、一発しばきたい。うん、とりあえずしばこう。

バキッ

「いでえ！！いきなりなにすんだヨ！！！！太一！！！！」

「ツッコミだ」

「ボク何もボケてないっしょ！？」

「お前の存在自体がもうふざけているからな」

「あんた何気にひどいことさうりと言いますよね!？」

俺の家はオートロックの高級マンションの一室だ。今は妹の<sup>かな</sup>可奈と一緒に暮らしている。

両親は海外出張でいない。まあ、そっちのがうるさいのが居なくていいけどな。え？学生の身分でよく高級マンションなんて住めるな？だって？まあ、ばあちゃんの仕送りとバイト代でまかなえてるんだけどな。

「もうーお兄ちゃん！あんまり友達にひどいこと言っちゃあだめだよ？かわいいそうだよ？」

妹は普通にかわいい。茶色のロングで背は俺よりちょっと小さい。

「ああ・・・可奈ちゃんは優しいねえ・・・（泣）ボクもこんな妹が欲しかったよ・・・」

「なんだ、それならお前もいるじゃん」

「え？嘘？」

「頭の中にいっぱい」

「それじゃあボク、ただのイタイ人だよ!？変態じゃないか!？それ!!--!」

「変態ジャン。おめえ」

「・・・少しは否定してください・・・（汗）」

ああ・・・やっぱり、コイツと居るとめんどくせえなあ・・・

「ふあああ・・・ボクなんだか眠くなってきたよ・・・」

「永眠しろ」

「それ、死ねってことかよ!!! あんたマジ最低だヨ!!! (泣)」

「なんか暖かい飲み物が恋しくなってきたな。外で自販機でコーヒーでも買ってくるかな」

「おつ、太一ボクもあつたかいコーヒー頼むよ」

「ああ・・・あつたかいコーラーだな、わかった」

「え・・・ちよっ・・・ちよっとおおおお!!!...!! コーヒーですよ!?! コーヒー!?!」

「ふいゝサミーな、しかし」

12月に入ったせいか最近凍えるように寒くなってきたな。こんなときは暖かいコーヒーに限るぜ。

「ん? あれは・・・」

道の向こうから女の子の姿が見えた・・・って

「…………おはようございます、皆瀬さん」

「いや、もうこんにちわの時間だからね、霜月さん」

「はい…………では、はろ」

「…………何故に英語？」

「…………いじめる？」

「はい、どこかで聞いたようなその台詞は禁止だからね」

あいかわらず、不思議な子だ。

「ところで霜月さんはどうしてこんなところに？」

「はい…………買い物に行く途中でして…………」

「ふん…………料理得意なんだ？霜月さん」

「はい…………食べ物料理なら得意ですけど、男の人を料理するのは未体験です」

「今、君何気にすごいこと言ったよね？（汗）」

「…………（／／／／／）」

「…………お願いですからそこで赤くならないで下さい…………（汗）」

「・・・・・・・・ところで、皆瀬さんは何故、こんなところに？」

「あ・・・・ああ、暖かい缶コーヒーを買いに来たんだよ」

「・・・・・・・・そうですか・・・・私はおしるこが好きです」

「おっ！いいね！甘くて暖かい冬の定番の食べ物だよ」

「・・・・・・・・」

霜月さんは前と同じようなうれしそうな顔をしていた。

「・・・・・・・・では、これどうぞ」

霜月さんはポッケから・・・・・・・・『ご。んですよ』を取り出し俺に渡した。

「・・・・・・・・はあ、ありがとうございます」

「では、また明日大学で」

・・・・・・・・今晚はもりもりご飯が進みそうだ・・・・・・・・

## 帰宅

「ほら、和也。ご希望の『ホットコーラー』だ」

「だから、ホットコーヒーってボク言っただよね！？っていうか！！  
！良くそんなの売ってたな！？」

「まあ、飲めよ」

「…………結構、チャレンジャーだよネ…………ボク…………」

そして、和也はおそろおそろ『ホットコーラー』を飲んでみた。

「………………………」

「…………おい、どうだ？」

「………………………意外といけるかもコレ……………」

「ちっ」

「何ですか！？今の舌打ち！？」



第2話『寒い時期はおでんがうまい』（後書き）

ちなみにボクはキムチ鍋が大好きです（^^）

### 第3話『名前で呼ばれるほど嬉しいものは無い』

「おっ！水玉！ひゅうっ！やっぱいいよねえ・・・チラリズムは。こ  
う・・・なんていうかな・・・見えるか見えないくらいの際どさ  
がいいんだよねえ・・・な！太一！」

「見えてんじゃねえか、チラリズムじゃねえ」

「へへ・・・まあ、いいじゃん。おっ！あんなところに美少女発見  
！むっん！神風よ！吹け！我に神風を与えよ！真空か。は。破！！  
！！」

「（他人のふり・・・他人のふり・・・）」

昼の休憩時間に大学のキャンパスを適当にそこら辺をうろつく俺、  
太一＋アホ1匹・・・暇人だな・・・

「ん？あれ？あの？太一君？なんでそんなにボクと距離おいてん  
の？（汗）」

「誰だ？お前？気安く喋りかけないで下さい、アホ」

「なんでいきなりボクに対して冷たくなってんですか！？」

「もうお前は喋るな。アホが俺にまで移る」

「あんた真剣にひどいですね！？（泣）」

「だから喋るなと言ってんだろがよお！！！！お前、周りの人の迷

惑考えたことあのか！？お前のアホがみんな感染してお前みたいな奴が増殖でもしてみろ！！！！かなり、気色悪いだろ！！！！嫌過ぎるだろ！！！！

環境問題まで発展してしまいは第5の公害・・・『アホ病』と出たら取り返しのつかないことになるんだぞ！！！！少しはみんなの幸せを考えろ！！！！疫病神！！！！」

「・・・なんでボクお前とつるんでいるんだろう・・・（泣）」

「あはははっ」お前、友達居ないからだろ」さっびしっ」

「楽しそうに語らないで下さい！！！！（泣）」

「なんやかんや言ってもお前とつるんでもう2年たつのか・・・色々あったよなあ・・・」

「ああ・・・そうだね。楽しかったよなあ・・・」

「ああ・・・お前が不良どもに因縁つけられて拳句の果てにはリンチにあったり、お前が一目ぼれしたかわいい女の子にお前が告白して見事に玉砕したり、お前が学食で買ったパンを食べてよくみるとそのパンにカビ生えてあとでゲリピー起こしたり、お前が一番のお気に入り洋楽を俺が借りて失くしちゃったり、お前がワン公（犬）に喧嘩売って見事にボロボロに負けたり、お前の先輩の陰口を俺が先輩にチクッてお前ぼこられたり・・・ああ・・・楽しかったよなあ・・・」

「嫌な記憶ばかり抽出するなよ！！！！！！それ、全部お前1人が楽しかっただけじゃん！！！！！！」

「ははははは！よくわかったな！お前、てんさい」（笑）

「思っても少しぐらい隠そうとしろよ！！！！そういうの！！！」

「まあ、常にオープンだからな、俺は。ちなみにお前むつつりな。

鍵で例えると・・・お前の部屋のドアノブには何重にも南京錠がつけられてて少しだけ部屋の中は見れるんだが薄暗くてわかりにくい・・・夜な夜な不気味な吐息だけが部屋から漏れている・・・『むふふふふ・・・』みたいな感じだ」

「怖いよ！！！！それ！！！！ボク部屋の中でナニしてんのお！？」

「・・・しばらくこのアホとぶらぶらとろついているとベンチに座っている見知った少女を発見した。

「・・・なにやら活字の本を読んでいるらしい・・・良くそんな小難しい本読めるな・・・俺なんか1ページ目でギブアップだぜ・・・」

「・・・」

「・・・集中して読んでいるのか俺が目の前に居ても気付かない様子・・・」

邪魔しちやあ悪いし、そつとしいてあげようか・・・

「・・・あ」

「・・・・・・・・あ」

ふいに彼女が顔を上げたので俺と彼女の目が合ってしまった・・・・

「・・・・・・・・こんばんわ、皆瀬さん」

「『こんにちは』ね、霜月さん」

・・・・・・・・彼女は青ぶちメガネをかけていた・・・・・・・・あつ、もうはずしちゃうの？

「おっゝなになにゝ太一？このかわい子ちゃん誰？知り合い？彼女ってワケじゃあないよなははゝ」

・・・・・・・・

しまった・・・・・・・・俺には今このアホ（和也）がいたんだった・・・・・・・・どうしよう？

「・・・・・・・・？皆瀬さん、うしろの方は？」

「知りません」

「なんでだよ！！！！お前の親友だろうがよ！！！！（汗）」

「やめてください、ボクに触れないで下さい。訴えますよ？」

「ひどい！！！！（泣）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ボーイズ。ブ？」

「「違います!!!!!!」(汗)」

うつわ・・・・・・・・コイツとはもっちゃった・・・・・・・・最悪・・・・・・・・

「へへ」ボク、斎藤和也」好きなタイプは君みたいな子」ボクのと『カズちゃん』って読んでね」ヨロシク」

「はい、私は霜月海です。よろしくお願いします、『カズちゃん』」

「ふ・・・・・・・・ふおおお・・・・・・・・き・・・・・・・・きたああああ」

・・・・・・・・なにがきたんだよ・・・・・・・・

というか・・・・・・・・なんか腹立つな・・・・・・・・一発殴つとくか。

バキッ

「ぐえ!な・・・・・・・・なにすんだよ!」

「別に」

「別にじゃないでしょ!?あんた!？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうかされましたか?皆瀬さん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・霜月さん、俺の願い聞いてくれるか?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい(／／／／／)」

あれ？なんで赤くなってるの？

「……………丁重に扱ってください（／／／／／）」

ナニを言っているんだ・・・君達は・・・

「………今度から俺を呼ぶとき『たいちゃん』って呼んでくれないか？」

「………（／／／／／）………はい、  
たいちゃん」

「ふ……ふおおお……き……きたああああ」

ん？あれ？デジャブ？

「てめー!!!太一!!!ずりぞー!!!」

「なにがだ！！！！！！」

「……あ……もう、こんな時間……」

ごそごそと自分のポケットから……また、洗剤を2つ取り出し、俺達に手渡す。

「……ん？なにコレ？」

「つまりだ、お前のその汚らしいからだをコレでも使ってぴかぴかにしやがれ！……この豚野郎！……って言う意味で渡したのさ」

「なにそれ！？ショッキング！！本当なの！？霜月さん！？」

「……………」

「返事してよ！！！！（泣）」

「では……私はこれで」

「ん、またな」

明日は多分、『こ。んですよ』だな。

#### 第4話『ぐだぐだイントロダクションプリーズ』（前書き）

全然サブタイトルに意味はありません。単に思いつかなかったただけなのです。



バキッ

「ほげっ！」

ばたっ

「……ふう、やっと静かになった……さて、次の授業までまだ時間があるし寝るとするか。」

「太一、あんたこんなとこで何やってんの？」

「……うるさいのが来た……」

「ん……？あんたなにこんなとこで寝てんのよ。邪魔」

どげしっ

「あぶぢっ！」

「……鳩尾に蹴りを入れられたアホ（和也）……可愛い  
そ」

「んだよ……人がせっかく気持ちよく寝ようとしてんのによ……」

「なによ……せっかくこんな美少女が声かけてきてんのに少しは嬉しそうな顔しなさいよ。まったく」

「……おえ」

「なに？その吐きそうな顔？それは私に対する挑戦かしら？ねえ？」

「いや・・・さっき、学食で食ったカツサンド食いすぎたみたいだ・・・」

「嘘おっしやい！！！！！！」

「ぎっ」

「あひゃん！」

「またもや鳩尾に蹴りを入れられるアホ（和也）。ああ・・・一応簡単に紹介しといてやろう。」

「俺の目の前にいる女は皐月<sup>みづき</sup>エミリ。胸がでかい。以上。」

「なによ！その紹介！」

「なんだ、不満でもあるのか？」

「あるわよ！『美少女』はどうしたのよ！？『美少女』は！？」

「・・・『美処女』の間違いだろ」

「何か言ったかしら？」

「にっこり」

「今日は一段ときれいだな、エミリ」

「ええっ・・・・・・・・（／／／）そんな・・・・・・・・」

へっ！楽勝♪

「なぐんていうと思ったか！この・・・すけこまし！！！！！！」

ひゅっ

びゅん

「うおっ！ついに本性を現したか！！！ブサイク！！！！」

「誰がブサイクよっ！！！！」

バキッ

「あひやははん！」

俺がエミリの繰り出すパンチをよけたおかげでアホ（和也）にクラッシュ！まあ、いいか。なぜかコイツ嬉しそうだし。いや、ブサイクとかいったけど正直エミリは綺麗だ。学園のマドンナとか言われるしな。『エミリ'sふあんくらぶ』とか存在するくらいだし。だから、不思議だ。なぜ、そんな女が俺みたいな平凡ぼん助な一学生に付きまとうのか？世の中、不思議なことがあるもんだ。

「待て~~~~~！」

「うわあああん！誰か助けて〜あの女の人に犯される〜」

「とんでもないことぶちまけながら逃げんじゃないわよ！」

「・・・・・・・・あつ、たいちゃん。明けましておめでとございます」

「明けてないから！明けてないから！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（／／／／／）」

「なんでそこで赤くなるの!？」

「まああああちいいいいなああああああいいいいいい  
!!!!!!」

「うおっ！もうきやがった!し・・・仕方ない！霜月さん！お願い  
があるんだ！」

「？」

「ふふふふふ・・・・・・・・もう、逃げられないわよ・・・・・・・・観念し  
なさい!・・・・・・・・ってだれ？その子？」

「あ・・・・・・・・ああ、この子は・・・・・・・・俺の」





だああああ……！！！！これ……めっさはずつつつつつつつつ  
う……………！！！！！！

恥ずかしくなつてつい逃げてしまった太一君でした。

恥ずかしくなつてつい逃げてしまった太一君でした。

「……………今日は罰としてご褒美なしです……………」

ちなみにその『ご褒美』とは太一君の予想通り『ご。んですよ』でした……

#### 第4話『ぐだぐだイントロダクションプリーズ』（後書き）

本当にぐだぐだになってきました・・・



コイツの父親は議員で母親は秘書、そして姉は弁護士というなんと  
もエリート家族なのだ。コイツ以外は・・・

「あれ？今なんかものすごく失礼なこと考えてなかった？」

「いや……まあ……頑張れよ、お前、色々と」

「そんな悲しそうな目で僕を見ないで下さい！！」（泣）」

「・・・で？お見合い？んだよ、うらやましいじゃねえか、コノヤロー。まあ、いい機会じゃねえか。一生もてない人生歩むのもなんだろ？受けとけよ、そのお見合い」

「……………あれ？なぜか涙が止まらないんですけど？僕？（泣）」

「そのお見合いのどこに不満があるんだっつーの」

「あ！そうだ！見てくれよ！コレ！」

すると自称美男子は俺に一枚のカードらしきものを手渡した。そこに写っていたものは・・・・・・

「……なにコレ？妖怪のトレカか？デーモンより強そうだな」

「違いますよ……！それがお見合いの相手なんですよ……！！！！！！！！」

「いー！ いー！ いー！」

な……なんだと!!!!!!この……妖怪みたいなのが人間のお

んなああああ~~~~~??????

思わずふいつちまったぞ!!!!!!マジかよ!!!!!!?????

「…………はあ、ホントに頑張れよ？お前？じゃあな、お前らの幸せをここから祈っているぜ？俺は」

「ちょっとおおおおお!!!!!!まってえええええ!!!!!!僕を見捨てないで!!!!!!……っていうか『ら』ってなんだよ!!!!!!『ら』って!?!?そんなもの幸せとは言いません!!!!!!人はソレを『アンハッピー』と言います!!!!!!」

「だああああ~~~~~!!!!!!……わかったよ!!!!!!……わかったから俺の足にしがみつくな!!!!!!……アホっ!!!!!!」

今回ばかりは本気でコイツのことがなんかかわいそうに見えたので相手にしてやるか…………

「しかし…………お前の両親の目は節穴か？コレの何処に『ぷりてい』要素があるというんだ？かろうじで人間かな…………?ってわかるぐらいの容姿だぞ？コレ？」

「ああ…………しかも悪いことにその怪物女、実は僕の父親の友達の娘なんだヨ…………つまりだ、政界の大物の娘なんだヨ…………つまり断つたりでもしてみる…………」

「消される？」

「冗談でも怖いこというなよ!!!!!!……今、背筋がぞくつて来たよ!!!!!!……ボク!!!!!!」

「消される?」

「二度も同じこと言わなくてもいいよ!!!!!!嫌がらせかよ!!!!!!」

「まあ……なんか『お見合い』じゃなくて『お見舞い』になりそうだな……」

「コワっ!それも激しくコワっ!(汗)」

「よし!俺にまかせておけ!お前の名前使って俺が『挑戦状』を書いてその怪物女に送りつけてやろう!どんな文面がいい?こんなんはどうだ?『おめえのツラからなんかくせえんだよ!!!!!!まず顔、洗え!!』」

「つてのはどうだ?相手の刺激をよりアップできるぞ?」

「やめてくれえええええ(泣)本当にボク、消されかねないよ!!!!!!」

「……?たいちゃんとキ。ーピーちゃん、こんなところでどうしたんですか?」

「ボク、『かずちゃん』なんですけど!?!」

「おう、霜月さん、聞いてやってくれよ?コイツの悲劇」

「悲劇とかいうなああああ！！！！！！（泣）」

ぺらぺらぺらぺら（説明中）

「ああ、なるほど・・・ぺらぺらがぺらぺらなんですね？」

「そうそう、ぺらちゃんがぺらぺらしたんだ」

「あんた達、本当に話しわかってんですか！？あんた達、さっきからぺらぺらしか言っていないじゃん！！！！！！」

「で、霜月さんこいつのお見合いぶち壊すいいアイデアねえかな？」

「そうですね・・・こんなのはどうですか？キ○ピーちゃんがとんでもない格好をしてお見合いに出席するって言うのは？」

「あのね？だから、ボクね？『かずちゃん』なんですよ？（泣）」

「ふむ・・・霜月さん！そのアイデアグッド！！！！！！よし、和也、お前、お見合いのとき全裸で出席しろ」

「行く前にわいせつ物陳列罪で捕まりますよ！？ボク！？」

「あつ、太一さん・・・いくらなんでもそれはちょっとかわいそうですね？せめて、ブリーフぐらいは履かせてあげないと・・・」

「ああ！そうだな！すっかり忘れてた！てへっ」

「あの・・・そういう問題じゃないと思うんですけど・・・」

（汗）

「よし、和也、お前、ブリーフ履いて頭にもブリーフ履いて『わーっはははは！！！！！！月光ブリーフ参上！！！！』とか言いながらお見合い会場を暴れまくれ」

「もうわけがわかんないんですけど……（汗）」

さあ、お見合いの日が楽しみだ。（↓第6話につづく）



なんか体中の穴という穴から脂汗吹き出てやがる……普通にきもいな〜（笑）

「……あの様子で大丈夫なんですか？ 斎藤さんは？」

「まあ、あとで俺が面白そうだからちよびつと手助けしてやるつもりだがもうちつと様子をみようぜ」

「はい、私も昼ドラを見ているようで楽しいです」

「……昼ドラにこんなシュチュエーションあったっけ？」

（和也視点）

くそ！なんなんだよ！この目の前の化け物は！ボクがせつかくこんなめっさきもい格好してんのになんでそんな好奇心な目で見つめてんだヨ！！おかしいだろ！？うわめっさ、見てるよ！！めっさ、見てるんですけどおおおお！！！！ちよつとおおおおお！！！！いやああああ！！！！

「うおっほん……では、そちらの彼は……斎藤和也と言ったかね？」

「ふ……ふあい……（汗）」

「まず、色々と聞きたいことがあるんだが……私の大事な大事な

可愛い愛娘を君に託すというのだ。色々と質問させてもらっよ」

なにが『可愛い愛娘』だ！！！あんたの娘には怖さときもさとケバサしかねえよ！！！！ちくしょう！！！！（泣）

「まず……その格好は何のつもりだね？」

「ええつと……（汗）」

「それに……君、今日が何の日分かっているのかね？んん？」

「その……（汗）」

「私達を小馬鹿にしているとしか思えないんだが？」

「あのその……（汗）」

「お父さん、やゝめゝてゝよおゝ？つてゆうゝかあ？めっちゃ素敵ジャン♪ちゅうしたいって感じいゝ♪」

くそ！なんだよ！！！！その口調！？女子高生气取りか！！！！いい歳こいてるくせに！！！！ムカつく！！！！

（再び太一視点）

「だめだ、アイツ。俺が少し手助けしてやるか」

「?でも流れるにはお見合いをぶっ壊す雰囲気なんじゃあないですか?」

「ううん、だめだ」

「?どうしてですか?」

「そうになると俺が楽しくないから」

「.....」

よし、まずは.....あいつのケータイに電話するか.....

ぷるるるる.....

(再び和也視点)

ボンバヘッ！ボンバヘッ！（昔なつかしのアニメロ）

「あつ、ちよつとすいません！失礼します」

「あつ、おい！お見合いのときぐらい携帯を切らないか！君！」



「そうか、それは良かった」

『なんでさ!?!』

「おっと、んなことはどうでもいい。突然だがお前を助けてやろう」

『へ・・・?マジで!?!どうやって!?!』

「ふむ・・・それはな・・・」  
「」

『うんうん・・・なるほど・・・って!?!!』  
「じゃあさっぱりわかんねえよ!?!?!ちやんと言えよ!?!?!!」

「いや・・・お前に教えたなら負けかな?と思つてさ」

『意味わかんねえよ!?!?!あんた5台詞前なんて言つたか覚えてる!?!』

「まあ、いいや。特別に教えてやる。だから俺を崇めろよ?お前」

『・・・なんであんた、んな上から目線なんすか・・・?(汗)』

果たして太一君の作戦とは・・・!?次回に続く・・・と思う。

## 第6話『和也君の憂鬱（中編）』（後書き）

本当は前編と後編で終わらす予定でしたが・・・長くなってしまいました。

第6・5話『普遍性を無視してお送りしております』（前書き）

明けましておめでとうございます。バイト三昧疲れ気味のかるびー  
えーるでございます。今年もよろしく願いします。長々と失礼し  
ました。では本編をドウゾ。

第6・5話『普遍性を無視してお送りしております』

「明けましておめでとう……!」

バ  
キ  
ツ

「がふっ！！！！た・・・太一！！！！いきなりなすん・・・」

「今年もヨロシク!!!!!!」

バキツドガツメキヤツ

「ちよっ……やめっ……いだっ！！！！あぶぴっ！！！！！！」

皆の衆、明けましておめでとう!!!俺は今、家で妹の可奈とこの馬鹿と正月を過ごしていた。

ちなみに今はちょうど夜中の12時。つまり、つい今しがた年が明けたばかりだ。

「はい、お兄ちゃん、緑茶だよ。明けましておめでとう」

「おお・・・新茶か・・・うおっ！茶柱が立つとる！！！！うむ、今年はいいいことがありそうだ。うはははは」

「ええ！……うそっ！私、茶柱立つてるの始めてみたよ」

「うむ……新茶はうまい……なごむな」

「なごむね」

「なごむなっ！ちよつとお！あんた新年早々なんで僕を殴るの！？」

「なんだよ、新年の挨拶に決まってるじゃあねえか」

「なにそれ！！じゃあ、なに！？あんたは近所の人に新年早々、挨拶するとき殴るのかよ！！！」

「するわけねえだろ、んなこと。常識もねえのかよてめーは」

「今、あんた僕に対してその常識を逸脱した行為をしましたよね！？」

「たく・・・新年早々やかましいな・・・このアホは・・・」

「まあまあ・・・和也さん、新年早々喧嘩もなんだし、私の作ったおせち食べてよ」

「おっ♪可奈ちゃんうまそうだね♪」

「・・・」

「・・・」

「え？あの？ちよつと？ふたりとも？ナンデスか？その冷めた目線？やだな・・・そんな見つめられると新たな恋が生まれそうだよ？・・・あれ？笑ってくれない？あれ？あれれれ？」

「・・・おい、可奈。コノバカちよつと沈めてきてもいいか？」

「沈める！？どこに！？（汗）」

「了承♪」

「了承しちゃった！！この子！！ちよっ・・・君達、ちよつとしたアメリカンジョークも通じないの

！？おせちがうまそうだなっってことだよ！？」

「空気読め、アホ。新年早々そっち系のギャグは禁句なんだよ」

「ゴメンナサイユルチテ（泣）・・・あれ？可奈ちゃん？その・・・手に持つてる注射器はなに？」

「えへっ♪なんだと思います？」

「ホントゴメンナチャイ（泣）ユルチテクダチャイ（泣）」

「あははははっ♪お前のその情けない顔おもしれえ♪今年も俺にそんな顔いっぱい見せてくれよ！なっ！アホっ♪」

「うるさいよ！あんた！（泣）」

「それはそうと・・・今から3人でテーブルゲームしねえか？」

「？お兄ちゃん、花札するの？それともカブ？麻雀？」

・・・妹よ・・・なぜ、お前がチョイスするゲームはギャンブルに関わりそうなものばかりなんだ・・・

お兄ちゃんそんなお金に汚い女の子に育てた覚えはないぞ・・・？

「・・・お前のせいか！！！！！」

バキッ

「げばお！！！！なんでいきなり殴るんだヨ！！！！！！意味わかんねえよ！！！！！！！」

「じゃあ・・・今からお前を殴らせていただきます。おらあ！！！！！！！」

「事前に言っても殴っちゃいやああああ！！！！！！あうち！！！！！！！」

「さて、んじゃあ、『坊主めくり』でもするか」

「・・・？お兄ちゃんどういうゲームなの？掛け金はいくら？」

「・・・きさまっ！！！！ゆるさん！！！！！」

バキッ

「あんぎゃあ！！！！！！！！またですかあああああ！？」

本当にどうしようもない奴だ・・・まったく・・・

「まあ、そのまんまだがひとりひとり百人一首のカードを引いていて『坊主』のカードを引いた奴が負けているゲームだ」

「・・・本当にそのまんまだね・・・」

「ああ、まんまだ。っていうわけで、さっそくお前引け、アホ。しよっぱなから坊主引いたらお前の明日はこねえと思えよ?」

「僕、命がけですね!!!!!!」(泣)」

「いいから早く引け、アホ」

「わかったよ………ほい」

ぴらっ

………

「よし、お前、ベランダからヒモなしバンジーな」

「ちょっとおおおおお!!!!!!」(泣)「冗談でしょ!?!やめてええええええ!!!!!!」

「お兄ちゃん………さすがにそれはだめだよ?」

「可奈ちゃん………うつつ、なんて優しい心を持った子なんだ・………」(泣)」

「ヒモをつけてあげなきゃ」

「持ってなかったあああああああ!!!!!!………うわあああああああん!!!!!!」(泣)」

「それよりお兄ちゃん、今から神社いかない?鐘鳴らそうよ」

「ああ・・・そうだな、おい、アホ行くぞ」

「・・・・・・・・可奈ちゃんの目が本気だった（泣）」

「はいはい」

「いででで！！！！おい！！！！押すな！！！！アホッ！！！！」

ぎゅうぎゅう

「押してませんよ！？っていうか、この状況で押すも何も無いですからね！？」

予想どおりといえば予想どおりだが・・・・・・・・深夜の元旦の神社は人がボウフラのように溢れかえっていた。

・・・・・・・・くそっ！全然、前に進めねえ！！！！！！

「・・・・・・・・おいつ！可奈！大丈夫か！？」

「きゃあ！今、誰かにお尻、触られたよ！！！！！！」

「和也！！！！てめえ！！！！！！」

「僕じゃないですよ！？（汗）っていうか、あんた達より僕、前に進んでるからありえないと思うんですけど！？」

「いや、お前は不可能なことを可能にしてくれる男だと俺は信じている」

「今のタイミングでその台詞言われても全然嬉しくないんですけど！？僕！？」

「はあはあ……やつと着いたね」

ようやく鐘の前にまで来た。さて……何を願いしうかね？

「（彼女が欲しい！彼女が欲しい！彼女が欲しい！彼女が欲しい！彼女が欲しい！彼女が欲しい！彼女が欲しい！彼女が欲しい！彼女が欲しい！彼女が欲しい！）」

こいつの考えていることは手に取るようにわかるな

可奈は？

• • • • •

・ ・ ・ ・ ・ ? 真剣に祈願しているが表情からはよく読めない ・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・ ! ? さらにその横を見てみるといつの間にか霜月さんが  
手を合わせて祈願していた ・ ・ ・ ・ ・

「霜月さん……偶然だね」

「……？あつ、たいちゃん、明けすぎておめでとつございます」

「……あれ？なに？その新年の挨拶？なんかおかしくない？」

「……（／／／／）」

「いや意味が分からない。そこで赤くなるの意味が分からないからね」

「おっ♪うみちゅあ〜ん♪明けすぎておめでとつね」

「いや、お前もそこで乗らなくてもいいから」

「……お兄ちゃん……この女の人誰？」

「……たいちゃん……この子、妹さんですか？」

「……あれ？なんか2人からどす黒いオーラが吹き出ているのは気のせいかな？」

「……『たいちゃん』？……お兄ちゃん、この女の人とどういう関係なの？」

「……アレ？イモウトヨ？コワイゾ？オニチャンスンゴクコワイヨ？」

「・・・・・・・・たいちゃん、知っています？直系血族や3親等内の血族は婚姻できないのって知ってました？」

「・・・・・・・・あれ？海ちゃん？いきなり話がとんでるぞ？っていうかなんで民法の婚姻の話なんかしているのかな？」

「・・・・・・・・そんなの愛があれば関係ないよね？オニイチャン♪」

「・・・・・・・・笑顔が・・・・・・・・怖い・・・・・・・・（泣）」

「・・・・・・・・愛の前に豚箱行きは嫌ですよね？たいちゃん♪」

「・・・・・・・・（以下同文）・・・・・・・・（泣）」

「おっ♪向こうにおみくじあるぜよ♪可奈ちゃん♪海ちゃん♪いこっぜ♪」

「「黙れ」」

「ひい！僕、黙ります！」

「・・・・・・・・空気を読めアホ・・・・・・・・（汗）」

「いつも兄をお世話していただきありがとうございます♪妹の可奈です♪これからもよろしくお願いしますね♪『海お姉ちゃん』♪」

「いえいえ、こちらこそヨロシクね♪『可奈ちゃん』♪」

「・・・・・・・・これから色々大変になりそうだ・・・・・・・・（汗）」

おまけ

「おい、和也？お前、くじ引きの結果どうだった？俺は末吉だったぞ？いいのか悪いのかよく分かん」

「・・・・・・・・」

「おい、和也のくせにシカトかよ。鼻の穴に手え突っ込むぞ？てめえ、ごらあ？」

「・・・・・・・・ぴよ。吉です・・・・・・・・」

「・・・・・・・・あ、そう？」

「コメント無しかよ！！！！！！！お願いなんか言って！！！！そういう反応が1番つらいよ！！！！！！！」

「・・・・・・・・ごめん、無理」

「それ、どういう意味！？（泣）」



第6・5話『普遍性を無視してお送りしております』（後書き）

更新が遅れ気味ですがこれからも頑張ります。

## 第7話『和也君の憂鬱（後編）』

というわけでお見合い再開。

「・・・で？和也君。その君の両サイドにいる人達は誰だね？」

「え・・・えゝつとその・・・」

「「殺し屋です」」

「ちよつとおおおお！！！！いきなり何言ってんのおおおお！！！！！！あんた達！？」

・・・俺と霜月さんは和也を救う（？）ために和也のお見合いに参加した。

俺の格好はグラサンに黒い背広姿。霜月さんの格好はなぜかチャイナ娘だった。

「（ちよつと！！！！あんた達マジで真面目にやってくれよ！！！！ホント目の前の人達、シャレ通じないんだから！！！！）」

「（うつせえな・・・わーったよ）」

「・・・で？君？ま・・・まさか・・・私の政治生命を絶とうとしているんじゃないか・・・」

「ち・・・違います！違います！お・・・おいっ！」

「すみません、間違えました。実は和也君の父親の愛人の息子です」

「そして、私がその愛人です」

「ちよっとおおおおおおお！……！！……！！……！！お前らああああ……！！……！！……！！（泣）」

「は……？はあ……わかりました」

「（ちよっと……！！なんで、んなややこしい関係にしてんだよ……！！……もつとあったらろう！？僕の両親の兄妹だとかさあ……！！……イメージ悪すぎだよ……！！……あんたら……！！……！！……！！）」

「（まあ、向こうも納得してくれてんだからいいじゃねえか。ていうか、お前のお見合いぶち壊すためなんだからいいじゃねえか）」

「（あんまり露骨にやると本当に僕、やばいですからね！？（泣））」

まったく……いちいち文句の多い奴だ。

「おっほん……え……と、じゃあ、斎藤君、さっきの続きだが……もう一度尋ねるが、その格好は何のつもりだね？どう見ても私達を馬鹿にしているとした見えなんだが？」

「え……え……とそのお……あの……」

「これがコイツの正装です」

「ちよっと……！！……！！真顔で何言ってるの！？あんた！？」

「……斎藤君……君は普段どいう仕事をしているのだね？」

「え……え……とそのお……あのお……」

「私みたいな格好をした子が夜、いっぱい集まっているお店です」

「ちよつと……！！！！海ちゃん……！！！！それ……！！！！すんごい誤解招くからね！？」

「……斎藤君……君の……趣味はなんだね？」

「え……え……とそのお……あのお……」

「り。ちゃん人形を集めてアヘアへすることです」

「ちよつとおおおお……！！！！太……！！！！ホントお願い……！！！！やめてええええ……！！！！」

「……斎藤君……君は……本当に娘を幸せにする気はあるのかね？」

「あ……あります……！！！！」

「それは嘘です。心の中では『てめえみてえな妖怪、誰が好きになるか、ばーか。豆腐のカドにドタマぶつけて肥溜めに落ちておっ死ぬ』とか思っています」

「ちよつ……！！！！確かにそれに近いことは思っているけどここで

はお口チャツーーーーーク!!!!!!」

「な!なに!?君は本当にそんなことを思っているのかね!?ええ!?!」

「和也ちゃんひどいいいいいいっていつか?」

「ち・・・違います!違います!ごめんなさい!ごめんなさいいいいいい!」

「(・・・今の乗っておけば、即お見合い中止になってたのに・・・アホだコイツ・・・)」

「(・・・絶好のタイミングでしたね・・・)」

「一体ナニがしたいんだ?このアホは?アホの考えていることはわからん。」

「お父さん!お父さん!そろそろ、かずつちと2人で話した言っというかあゝ?愛を育みたいっていうかあゝ?」

「う・・・ううむ・・・しかしだな・・・(汗)」

「そうですよ、あなた。せつかくのお見合いなんですから・・・色々したいでしょうし・・・」

ぬ、なんだか面白い展開になってきたな。

「（ちよっ・・・！（汗）ちよっとおおおお！！！！！！なんで！？なんで、こういう展開になってんのお！？おかしいだろ！？おかしいよね！？）」

「（おかしいのはお前の顔だ。こっちに顔向けるな、気持ち悪い）」

「（こんなときにまでいぢらなくてもいいじゃないですか！？（泣）ちよっと！！！！太一！！！！マジでタスケテ！！！！）」

「（嫌です）」

「（なんでさ！？（泣））」

「（面白いから）」

「（あんた最低だよ！！！！（泣）じゃ・・・じゃあ！！！！海ちゃん！！！！オネガイ！！！！タスケテ！！！！）」

「（嫌です）」

「（なんでさ！？（泣））」

「（おめえ、こんなかわい女に頼るってのかよ・・・サイテーだな、おめえ）」

「（すみません・・・和也さん、私・・・私・・・力になれそうにありません・・・しくしく）」

「あ・あれ！？ナニ！？この空気！？なんで僕責められてんの！？おかしいよね！？コレ！？」

「さあ・・・後は若い2人にまかせてそろそろ、私達は席を外しましょうね?あなた」

「ぬ・・・ぬう・・・わかつた」

そして続々と部屋から立ち去る……

「グッドラック!!!」

くいつ（親指を下に向ける）

「そ……それ！？どういう意味！？ちよつ……！！たすけ」

「げひひヒヒ．．．私このときを待っていたの．．．かず  
 うち．．．さあ．．．2人で愛を育みましょう．．．  
 ．．．ハアーハアーハアーハアーハアーハアー」

「い……いやあああああああああああ  
あああああああ！！！！！！！！！」

く……くるなああああああああああああ  
 ああああああああ！！！！！！！！！！

[illegible]

和也君、アーメン。

後日

「よ、和也。元気か？」

「……………」

「……………おい？和也？」

「……………」

「……………おい……………」

「……………汚れちゃったよ……………  
……………僕……………初めてだったのに……………  
……………あんな……………むりやり……………  
……………しくしく(泣)……………」

「そ、そうか(汗)……………」

第8話『お食事中の方はスミマセン（汗）』（前書き）

サブタイトルどうりスミマセン（汗）

## 第8話『お食事中の方はスミマセン(汗)』

「……………暇だねえ……………太一……………」

「……………暇だなあ……………なあ、お前なんか面白いことしろよ……………」

暇なのは決して作者のネタ切れとかではない……………と思う。

「……………ないよ……………なら、太一が考えてくれよ……………」

「……………よし、いいこと思いついたぞ、和也」

「……………なんすか?」

「お前が肥溜めにどぼおおおん。俺、ハッピー」

「あんた最低だよ……………!(泣)」

「ならこついうのはどうだ?お前がひゃっほうつうつう……………!どぼおおおん……………!肥溜めサイコ  
ー。俺、ハッピー」

「一緒じゃねえか……………!」

「いやいやゝ違うんだな、コレが。お前が喜びながら『いんやゝ肥溜め、サイコー……………!マジうめーよ……………!肥溜め!ひゃっほうつうつう……………!』とかいいながら肥溜めではしゃばしゃ泳いでんだ

？想像するだけですげえだろ？」

「すごくないよ！！！！！！きもいよ！！！！！！汚いよ！！！！！！それ、かなりクレイバーな人だよ！！！！！！勝手に僕を変な人にしないでくれる！？」

「黙れ、イカレポンチ」

「イカレポンチ！？（汗）」

・・・あゝ、暇だ・・・和也をいじめることしか思いつかねえ・・・

なぐんか、面白いイベントとか起きねえかなあ・・・

例えば・・・いきなりかわいらしい女の子が俺の目の前に現れて・・・『太一先輩・・・（／／／）』

私を・・・食べてください（／／／）とか言ってきたりしねえかな・・・

いかんいかん・・・和也じゃあるまいし、んなアホな妄想は止めよう・・・

「はふはふ~~~~うえええ~~~~ん！まってくださ〜いいいいいい！！！！！！！！」

「ニヤ〜」

中庭の方からかわいらしい女の子と・・・？ネコか？ネコがこ

つちに向かつて走ってきた。

・・・どうやら女の子はネコを必死で追いかけているようだ。

「・・・・・・・・なんかこっちに向かつてくるな」

「・・・・・・・・そうだね」

すでにネコは俺らの前方約30メートル付近まで来ていた。

「はふはふう~~~~!!.....!あ~~~~!そこの方すみません~~~~  
く!!!!!!そこの子猫ちゃん捕まえてくれませんかですく!!」

「・・・・・・・・だとよ、和也、どうする?」

「へへへ.....俺に任せときなよ、太一!俺の猫さばきを見とけよ!  
!あと、あの子もさばくからさくへへへ」

「いやらしい手つきをするな」

そして、ネコは俺らが目の前にいることに気付いて一瞬ひるんだ!

「よし.....子猫ちゃん、そのままじつとしてろよ~~~~なにもしないからさく~~~~うひひひひ」

「・・・・・・・・おめえ、ネコでもいけるのか?お前、なんか不憫な奴に見えてきたよ・・・・・・・・」

「ちょっと!ナニ言ってますか!?!いけるわけないでしょう!?  
(汗)」

そして、和也がネコから目を離れた隙にネコが和也に飛び掛つてきた！

「へ？な・・・なんだあ！？」

「ウニヤアアアア！！！！！！」

ズブシュッ！！！！！！

ネコの引つかき攻撃が和也にヒットした！！！！！！

「ぎゃああああ！！！！！！！！！」

効果は抜群のようだ！！！！！！和也に50のダメージ！！！！！！

「いてててて！！！！！！なんだ！？このネコ！！！！！！人間様を舐めやがて！！！！！！！！！」

「いや、舐めているのはお前だけだからな」

「ウニヤアアアア！！！！！！！！！」

ズブシュッ！！！！！！

ネコの引つかき攻撃が和也に炸裂した！！！！！！

「ぎゃああああ！！！！！！！！またですかああああ~~~~~~~~！！！！！！！！！！」

効果は抜群のようだ！！！！！！和也に100のダメージ！！！！！！

和也の意識が遠のく……

「って！！！！おい！！！！勝手に殺すなよ！！！！まだ、生きてるよ！！！！って！！！！いだ！！！！あいだだだだ！！！！！！っていうか！！！！！！助け・・・！あんぎゃああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

「はふ〜・・・あのう、そのネコさんを捕まえて頂いてありがとうございます！！！！！！」

どうやらこのネコはこの女の子の飼い猫だったようだ。にしても……  
……この子、ちっちゃくてかわゆいな……

「いやいや、当然のことをしたまでで、お礼なんていらないＺＥ！」

「チクシヨ おおおおおおお………!! あんたは何もしてないでしょうが………!!」

「見ろよ！！！！この引つかき傷！！！！なんで僕だけこんな痛い思いしなきゃあならないの！？」

和也の体中にはネコの引っかき傷でいっぱいだった。

「あつ……！ごめんなさい！わ、私のミーちゃんのせいで怪我させてしまいました……」

『ミーちゃん』とはどうやらそのネコの名前のようだ。

「本当だヨ！まったく・・・ちゃあんとお礼をしてもらわないとねえ・・・へへへ・・・」

「は・・・はい！どんなお礼でもします！」

「どんな・・・でも？へへへ・・・いいじゃん、いいじゃん・・・なら体で払ってもらおうかな？うへへへ・・・どうする？太一い、この子喰っちゃおうぜ」

「お前、その台詞完全に悪者な」

ぐいつ

「え・・・え？」

「ははは！なーに！そんなに怯えなくていいよ！痛いのはちよつとだけだからさ！あとは楽になれるよ」

ぐいつぐいつ

「え？え？え？・・・」

「ははは！そんなに抵抗しなくてもいいってさあ・・・力を抜いて・・・力を・・・早くこつちに來いっていったらおおおお！！！！ハアハアハアハア！！！！」

「お前、いきなり暴走しすぎな」

獣か、コイツは。

「こらあああああああ！！！！！！！！！なにやってんのよ！！！！！！！！！！」

グキッ

「おげぶっお！！！！！！！！」

アホ（和也）はうしろから来た女の子の跳び蹴りを首にまともに喰らった。・・・喰らった時、なんか変な音がしたがまあ和也だから別にどーでもいいや、わーい。

「・・・あれえ？美夜ちゃん？どうして、こんなところに・・・」

「どうして？じゃないわよ！！！！お姉ちゃん！！！！また、こんなところふらふらぽけっつと歩いちゃって！！」

！お姉ちゃんは私がいないとすぐ知らない人について行っちゃうんだから！！！！また、今みたいな変質者がでてきたらどうすんの！？さあ、行くわよ！！！！」

・・・ん？ん？・・・顔同じ？・・・この2人双子か？

「あ・・・あ・・・まってえ、美夜ちゃん・・・私

のネコさんを捕まえてくれた人この人なのよ……お礼したいからちよつと来て……」

「……ふん……そうなの。……ちよつと、そのいかにも『俺に触れるとヤケドするぜ』みたいな雰囲気をもし出したそのあんた!」

「いや……別にそんなことこれっぽっちも考えていないんだが……」

「いちいちうっさいわねえ……で?あんた、そこで寝ている変態野郎の仲間?だとしたらクロス」

「……おいおいおい……ずいぶん物騒な子だな……」

「ううん、俺もこんな奴知らないよ。というか、むしろ俺が聞いたいね、誰?コイツ?」

「がばあ!……!」

「ちよつと!……!親友だろ!?僕たち!?なんでんな『誰?コイツ?未確認生命体か?』みたいな顔すんなよ!……!」

「そこまで言つてねえ。」

「つ!……!ちよつと、そのすけこまし!……!それ以上私達に近寄つたら警察呼ぶわよ!……!」

「ははは、おいおい……太一……お前、なにやらかしたんだよ……」

「お前だよ、お前」

「嘘！？なんで！？僕、何もやってないじゃん！？」

「・・・・・・・・」

ぼちっ（録音再生）

『うへへへ』『いいじゃん、いいじゃん』『喰っちゃおうぜ』『早くこっちに来い』『痛いのは最初だけだからさ！』『ハアハア』『僕もうパンパンだぜ？』『入れちゃうぜ？』『よし！入ったああああ』『い・・・・・・・・いやあああああああ』

ぼちっ（停止）

「・・・・・・・・（汗）」（和也）

「・・・・・・・・」（美夜）

「・・・・・・・・な？」

「な？じゃないよ！！！！なに勝手に僕の声録音してんだよ！？なに加工してんだよ！？しかも最後のほうとか僕、言った覚えのない変な台詞混じってるし！！！！！」

「っていうことで、ここはひとつ俺の顔に免じて許してやってくれないか？こいつ・・・・・・・・色々とかわいそうな奴でさ・・・・・・・・頼むよ・・・・・・・・」

「美夜」

「・・・・・・・・」  
（美夜のオネエサン）

「ちよつとおおおお！……！！……！！……！！そんな切ない顔で僕を見つめないで……………」

「！」

「……生きていねばきつとイイコトがあるさ……頑張れ……」

「頼みますからあんたもうちよつと黙ってえええええええええええ！  
！！！！！！！！」（泣）」

[illegible]

「双子の妹の葉月美夜です。ヨロシク」

「ふ……フタ  
○リ!?」  
(和也)

「双子な」

「ガン！お姉ちゃんの台詞とられたあゝゝゝ美夜ちゃんの意地悪ですうゝゝゝうええええん」

「ああゝもう！こんなところで泣かないでよ！お姉ちゃん！なんか私が泣かしてるみたいじゃない！」

「……………（汗）なんか対照的な姉妹だな……………  
のほほん美少女姉、ツンツン美少女妹……………だが、  
それがいい！」

「俺は皆瀬太一、まあ気軽に『たいちゃん』と読んでくれ。あ……………  
この呼び名で呼ぶとき、1オクターブ上げて呼んでくれ……………た  
いちゃん』とな」

「な……………！（／＼／＼）ふざけるな……………！そんな恥ずかしい呼び名  
で呼べるか……………！この変態……………！」

「こらこら……………だめでしょう？美夜ちゃん……………女の子がそんな  
汚い言葉使っちゃいけません……………めっです……………？」

「……………（／＼／＼）」

「……………うむ、ある意味このツンデレちゃんは姉が苦手のようだな……………  
もちろん、『イイ』意味で。」

「へへへ、僕の名前は斎藤和也だよ……………よろ……………」

「ちなみにコイツのあだ名は『ゲロまみれ』な。だから気軽にそう  
呼んでやってくれ」

「ちよっとおおおおおおおお……………！いきなり、なんてこ  
と言っんですか……………？あんた……………！！！！！！」

「はい、よろしくねえ、ゲロまみれさん」

「お姉ちゃんの半径1 km以内に近づくんじゃないわよ。☞ゲロまみれ」

「嫌だあああああああああああああ……！！！！！！！！  
 …！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！そんなサイテーなあだ名、嫌ああああ  
 ああああああああああああああああ……！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

女友達が2人増えました。

第9話『アクシデントっていいよね?』(前書き)

今回は内容が薄くなったような気がします・・・  
いつもそうですが。

## 第9話『アクシデントっていいよね?』

「なあ・・・太一いゝ・・・ギャルゲーの世界では常にアクシデントってつきものだよね・・・」

「・・・なんだ、いきなり・・・ていつかいきなりギャルゲーの話をしだすお前は末期だな」

「いいから聞いてよ・・・例えばさあ・・・お風呂場で裸の女の子に出くわすイベントとか」

「イベントってなんだよ・・・(汗)」

ガラッ・・・

『!!--!!だ、誰!?(ノノノ)』

『・・・お、なゝんだ可奈か、悪い!風呂入ってたのか!あははは』

『いやゝん(ノノノ)おにいちゃんのマキシマムエッチいゝ(ノノノ)』

「今すぐ病院へ行け」

「な・・・なんでだよ!!!!よくあるイベントだろ!?!?こーいうの!?!」

「しかも・・・てめえ!!!!なんでモデルが俺と可奈なんだよ!!!!死ね!!!!アホっ!!!!!!」

バッキバッキ

「ぎゃああああす!!!!!!ごめんなさい!!!!!!ごめんなさい!!!!!!」

「でさあ・・・太一、こんなアクシデントもあると思うんだ」

「・・・まだその話、続けるのか(汗)」

『き・・・きゃあああ!!!!だ・・・誰っ!?!?か・・・勝手に私のリコーダーぺろぺろ舐めたの!?!』

『あ……和也さん……もう♪ちくわと私のリコーダーを  
間違えるなんて……この、う・っ・か・り・さ・ん♪えへ♪』

「いやありそうじゃない？こーいうの？」

「え．．．？ちよつと．．．．．？ひっ！い．．いやあああああ  
ああああ！！！！！！！！！！」

うむ．．．やはりこの爽快な青空の下で食うこのカツサンドはうめえ．．．．．むしやむしや。

「……急になんだか舌がしびれるくらいの熱い緑茶がほしくな  
ったな……」

「はい、どうぞ。熱いので気をつけてください」

「おお……ありがと……って海ちゃん？い、いつの間に横  
に……」(汗)」

「はい、どうせ私はたいちゃんにとってしょせん背後霊みたいな存  
在ですから……」

「どうん……」

「いやいや……いきなり卑屈にならないでよ……」

「じい……」

「うう……その視線が辛い……」

「……」(汗)」

「……」

「にっこり」

「……あれ？笑った？……やっぱこの子不思議ちゃんだ  
ーよくわかんねー……」

「でも、やっぱ笑ったときが1番かわいいな……この子……」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・うっむ、間がたん・・・・・・・・（汗）なんか話題ねえかな」

「・・・・・・・・なあ、海ちゃん」

「・・・・・・・・はい？」

「和也のアホがさっき言ってたんだけどさ・・・・・・・・身の回りによくあるアクシデントってある？」

「アクシデント・・・・・・・・ですか・・・・・・・・？」

「そうそう」

「・・・・・・・・悩んでいる海ちゃんもかわいいな」

「・・・・・・・・・・そうですね」

「・・・・・・・・チュッ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？（／／／）」

「・・・・・・・・・・・・・・・・二ついつのもある意味アクシデントという  
ものではないでしょ・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（／／／）」

「〜〜（／／／）し、失礼します（／／／）」

たっ たっ たっ

・・・・・・・・・・・・・・・・頬にキスされちった・・・・・・・・（／／／）

確かにアクシデント・・・・・・・・・・・・・・・・なのか？（／／／）

おまけ

「せゝの・・・オルア!!!!!!!!!!」

バキッ!!!!!!!!!!

「ぎゃぶっ!!!!!!!!!!い、いきなりなにすんだヨ!? た、太一い！  
?（汗）」

「アクシデントだ」

「どんなアクシデントだよ……！！！！（泣）殴る前、なんか「せ」の……」とかいってたジャン……！！（泣）」

「いや……アクシデントっていいよね……和也」

「こんなアクシデント嫌です……！！！！！！（泣）」

## 第10話『くさは健康食品』

休日の日曜日、俺こと皆瀬太一は家から少し離れたショッピングモールにくりだしています。

別に用はなかったんだが適当にその辺を徘徊していた……が。

「……で？和也、なんで、てめえまでついて来るんだヨ。なんだ？新種のストーカーか？お前は？」

「まあまあ、いいじゃん♪いいじゃん♪僕たち親友同士じゃん♪」

「あれ？そうだったけ？」

「そうだよっ！？（泣）ボクたちオトモダチデショッ！？ネエ！？」

「悪趣味だな、お前。あははは♪」

「どこがっ！？（汗）あんたのその思考のほうが悪だよっ！！！！悪っ！！！！」

あゝああ……このアホはうるせくなあ……

はあ……とりあえずなんか疲れたから近くの喫茶店で休憩でもすつか……

「……………」

「へへへ♪太一？どこいくのさ？」

「…………俺についてくんなよ、アホ」

「いいじゃん♪僕たち親友じゃん♪」

「あれ？そうだったけ？」

「そうだよっ！？（泣）ていうか、二度目ですからねっ！？それっ  
！？」

「ごめん……。俺、今までお前の事、俺の親友じゃなくて俺の下僕Hとしか思ってたんだ……」

あ、ちなみにHってヘタレの略な」

「何それっ！？（泣）てめえ！！！！太一！！！！あんましふざけてる  
と僕も黙っていませんからねっ！？？！しまいにお前の妹の可奈ちゃん  
喰っちゃうぞ！！！！おらあ！！！！」

「ああん？んなことしたらためえ含め、てめえの一族みな末代まで呪うぞ？こらあ？」

「ごめんなさいでしたあああああああああ……！！！！！！！！！！」

つたく……やっぱいいつうぜえ。

「まあ、寛大な俺様だからな、ありがたく許してやる。まあ、とりあえず謝礼としてその喫茶店でコーヒーおごれ、下僕H」

「・・・あんたいつも僕に対して上から目線つすよねえ・・・」

「ああ？」

「ありがたくおごらせていただきます！！！！太一様！！！！（泣）」

ひゃっほっこれでコーヒー代浮いたぜ。

「いらっしゃいませっ」

「おお……………」

「うひゃ……………」

入った喫茶店の内装は少し薄暗くて感じのいい店だった。うむ……………  
落ち着くではないか、いい店だ。

「はあはあ……………ウェイトレスさんの制服かわいいつすねえ……………  
なあ、太一」

「どうでもいいがそのキモ顔と鼻息やめろ」

テーブル席で座っていると早速、店員の女の子らしき子が来た……………

「お客様、ご注文はお決まりにな……………ってうえ！？太一！？」

「……………ん？ってうお！！！！鬼ババア！！」

「誰が鬼ババアよっ！！なんで太一と一匹がこんなとこにいのよ！！！！」

「い・・・一匹って僕のことですか？（汗）」

かわいらしい制服を身にまとった天使みたいな女の子が来たと思ったら、そこ居たのはまったく正反対の地獄の淵から這い上がった悪魔みたいな女、エミリだった。うへえ・・・・・・最悪う・・・

「・・・あんた、今失礼な事考えてたでしょ？」

「イヤ、ゼンゼン。ダツテボクイイコダモン」

「ははっ、それにしても太一い！かわいいよねえ！ここのウェイトレスさんの制服・・・げへへ」

「ああ・・・馬子にも衣「シュッ！ザクッ！！」・・・  
（汗）」

「何か言っただかしら」

にっこり

「イイエ、ゼンゼン。ダツテボクイイコダモン」

こ・・・こええ・・・こええよこの女・・・だっていきなりテーブルのど真ん中に包丁が突き刺さったんだもん・・・この女、やる時はやるな・・・（汗）

「・・・で？なんだ、エミリ。お前、ここでバイトでもしてんの？」

「ええ！？ば・・・バ。！？（汗）」

「バイトな」

「ええ、そうよ。といっても、ここは私の伯父さんが店長やってる喫茶店で紹介されただけだね」

「ふん・・・ところでお前・・・意外と似合ってるな、ソレ」

「い・・・意外とつてなによ・・・でも、ありがと（／／／）」

「胸あたりが」（和也）

バキッ！！！！

「・・・ごめんなさい（泣）」

「・・・ところでどうでもいいがよ・・・そろそろ注文したいんだけど？」

「ああ・・・忘れてたわ！おほほほ！ごめんあそばせ！」

「なんだ・・・この女・・・きもちわりい・・・（汗）」

「おい！太一！僕のおごりなんだから少しは遠慮してたのめよ！」

「ああ……わかった、で？エミリ？この店で1番たけえメニューなに？」

「これね、『ジャンボトロピカルフルーツさわやかプリンにそそられて』（5000円）よ」

「じゃあ、それで」

「あんだ、人の話全然聞いてないですねっ！？（泣）」

「うんめえ〜〜〜〜まじ、トロピカル〜〜さわやかプリンにそそられる〜〜〜〜」

「……ほんとあんだ悪魔ですね……（泣）」

「？どうした？お前も食べよ、ぱくぱく」

「コーヒー注文したのになんで僕だけ『くさや』がくるんですかね！？（泣）っていうか臭いんですけど！？」

「しらねーよ、んなもん、ぱくぱく」

多分、エミリの仕業だな。和也だからどーでもいいけど。とりあえず、臭いな。

「くそっ！！！！店長出て来い！！！！この店、裁判で訴えて慰謝料ふんどくつてやるっ！！！！（泣）あゝくさっ！！！！」

「・・・ん？おい？和也、お前の頭の上になんか紙乗ってるぞ？とりあえずくせえ」

「ん・・・うわあ！！！！いつの間にこんなものがっ！！！！！！！！」

ていうか、すぐに気付けよ、しかし臭いな。

「なになに・・・・・・うつわゝ、まだ臭いよ」

『チクツタラ、ヒキチギル』

「「・・・・・・」」

「・・・まだ、臭い。」

「あははは！！！！！！くさやうんめえ！！！！！！サイコーだよっ！！！！！！くさやっ！！！！！！！！（泣）」

バクバクっ！！！！！！！！

・・・喫茶店でくさやバクバク食ってる奴、初めて見たよ、俺・  
・・・（汗）

「あははは！……！……！太一！……！くさは健康食品なんだぞ  
！……！……！うらやましいだろ！……！あははははははははは！  
！……！……！……！（泣）臭いなあ、あはははははははははは！  
！……！……！……！

（泣）」

「・・・とりあえず、一旦離れてくれないか？和也？他の人  
お前と同じ目で見られるの嫌だからさ」

「ちくしょおおおおおおお！……！……！……！臭いなあ、  
あははははは！……！……！……！（泣）」

とりあえず、泣きながらバクバクくさや食う和也はめちゃくちや醜  
かった。

「ふう………あゝうまかった。ごちそうさん」

「…………げふつ……………なんか僕、一気にMP100減っ  
た気分だヨ……………」

和也はなんかげっそりしていた。これはこれできもいな。

「さあゝって食うもん食ったし帰」きゃあ！お・・・お客様！こ・・・  
・困りますう！！！！！！」・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・なあ、太一」

「・・・・・・・・・・ああ、和也」

「「美少女の節操の危機を救え！！！！！！」」

なんか同盟が生まれた（↓続く）

第11話『僕は。。。。を超越するッ！！！』

【前回までのお話】

とりあえず、花粉症うぜえ。

「へへへ。。。いいじゃんいいじゃん、俺達と遊ぼうよ〜ねえ  
ちゃ〜ん♪きひひ」

「うひゃひゃひゃ！おいおい〜トシい〜この子怖がつてんじゃんジ  
ヤン。もつと優しくだなあ〜♪ところでね〜ちゃん、いいケツして  
んじゃん♪この近くにオケカラあんだけどさあ〜一緒に遊ぼうぜえ  
」

さわさわ

「きゃん。。。やめてください。。。お客様。。。」

「おい！聞いたか！トシい！『きゃん』だつてよ！ちよ〜ぷりち〜  
」

「きゃんきゃん♪ぎやははははは！。。。！。。。かあい〜ね〜ちゃ  
ん」

「あ．．．あいつら．．．．．僕の女をよくも．．．．．ゆ、ゆるせん」

「別にお前の女じゃないけどな」

俺と和也は遠目からチンピラ共の悪の所業を発見した。和也じゃないがとりあえずゆるせんな．．．．．

「よし！あいつらをぼっこぼこのけちよんけちよんにしてやる！おつと！太一い！お前は出てくるなよ？遠目から僕のかっこいいところ見ててよ。えへへへ．．．．．」

「擬音にいまいち気合が入っていないけどな、お前」

「いちいちうるさいですねえ！！あんたは！！！（汗）いいんです！！！！１分後にはあの子と将来を誓い合う仲になるんですから！！！！」

「お前、素敵な夢見すぎな。止めとけて、和也」

「くつくく．．．．．止めるなよ．．．．．太一い．．．．．『いやんばかんあふう』とか甘い吐息が聞こえてきても嫉妬するなよ？太一いゝへへへ！！」

「止めとけて．．．．．お前、チンカスでロリコンで救いようもないクズなんだからさ」

「もうちょつと柔和な言い方にしましょうねっ！？（泣）っていう

か！ロリコンは関係ないだろ！クラーーーーー！！！！（泣）」

「でも否定はしないんだな」

そして和也は胸を張ってチンピラ共の席まで歩いていった。

「お、おおおい！おまいらあ！」

和也の第1声……なんでいきなりちよつと動揺してんだよ。

「ああん！？なんだあ！？てめえは！？ぶつころされてえのか！？ちよもらんまにすんぞゴラア！！！！！」

「邪魔すんじゃねえ！！！！！！ハゲえええ~~~~~とつとと失せろや！ボケがあ！！！！！！！」

「ひい！」

・  
・  
・  
・

「お前、生きている価値のないヘタレな」



「おい！そのチンピラ三姉妹！！！！」

「ああん！？またてめえかつ！！！！！！いい加減しねえと奥歯ガタ  
ガタいわすぞ！！！！ワレエ！！！！！！」

「誰が三姉妹だあ！？っていうか！人足りねえぞ！？ゴラアーー  
！！！！！！！！」

「お前さん、どうでもいいことにツッコミいれるんだな」

「ひい！やっぱり怖いです！！！！太一い！！！！！！」

「おい！和也！うるたえるんじゃないっ！ドイツ軍人はうるたえ  
ないっ！」

「僕は軍人じゃありません！！！！（泣）」

おいおいおい・・・・・・ここに来てヘタレ本領発揮かよ、和也。

「いいか、落ち着け。そして、切腹しろ」

「なんでですかっ！？くそう！！！！やってやるよ・・・・・・見てろ  
よ！！！！！！！！」



そして！ついに！和也はブリーフに手をかけるっ！！！！！！

「ひ、ひい！！！！！！に・・・逃げるぞォーーーー！！！！！！ト  
シーーーー！！！！！！」

「ひいええええええええええ！！！！！！！！！！！！！！！！ほ、掘られるう  
ーーーー！！！！！！！！」

バタバタ・・・・・・

そして、チンピラ2人組は逃げ去った・・・・・・

「・・・・・・」

「やったな！和也っ！大成功だZE」

「ああ！やったZE 太一い！ひゃっほーーーーう！！！！！！・・・  
・・・ってよく考えたらこれじゃあ、僕ただの変態じゃあないです  
かつ！？（汗）」

「いいじゃん、結果的に成功したんだからよ」

「っていつかよしえって誰だよ！！！！！！（汗）なんかさっきの台  
詞よく考えたら今まで普通の彼女持ちだった男がある日突然発狂し  
て目覚めたみたいだったじゃん！！！！！！気持ち悪いよ！！！！！！」

「素敵な解説をありがとう、和也」

「う、うるさい！！！！！！ちよっ・・・ちよっところち来いいいい  
！！！！！！太一いーーーー！！！！！！（泣）」

「うわっ！やめろっ！こっち来んな！俺を掘る気かつ！？」

「誰が掘るかっ！！！！！！！（泣）」

「そ、そういえば………！太一い！さっきのかわいい子ちゃんはどこ行った！？」

「……あれ？さっきまでいたのに………」

「……さあ？どこでしょう？」

古泉風にとぼけてみる。そして、その隙に逃げる。

「ちくしょうっ！！！！！！（泣）せつかくかわいい子ちゃんだったのに………太一のせいだぞっ！！！！！！」

「コラぁ！！！！！！………って、あれ？太一？いない？おう……い？太一さん………？あれ？」

ポンッ………（肩を叩く音）

「何だよ！！！！ちくしょう！！！！まだ僕をおちよくる気か！！！！！！たい………ち？」

「うん、ちょっとこっち来てくれるかな？ハードゲイ君」

「え？え？え？あ、あの．．．．．？」

ぐいっ

「いや、なに、ちょっとその署で君のお話聞いただけだからさ。じつとしていてくれるとオジサン助かるなあ．．．．．」

「い、いやこれはデスネ？（汗）あ、あの．．．．．その．．．．．目覚めたんじゃないなくてよしえがそのあの掘られてですね．．．．．（汗）」（↑テンパる和也君）

「はいはい．．．．．続きは署で聞くから．．．．．ちょっとこち来てね」

「い、いやあああああああ~~~~~~~~!!!!!!  
!!!!!!」（汗）」

## 第12話『お前、どんだけ?』

今日も今日とて大学に行き、講義を受けるために教室に入ってみると窓側の席でぽけっとアホ面をしている

和也の姿を発見したので面倒臭いが一応朝の挨拶をしておく。

「よう、和也、Nice boat!」

「・・・へ?太一?え、な、なに?その挨拶?(汗)」

バキッ

「Ouch!・・・ちょ・・・ちょっとおおおお!・・・いきなりなんで殴るんですかっ!?(汗)」

「アホかオメーは。俺が『Nice boat』って言ったらお前は全身で大喜びしながら『ひゃっほーーーーーう!!!!!!!!!!我ら愛しの言葉様、バンザイ!!!!!!バンザイ!!!!!!』って大声で返すのが世間一般の常識なんだぞ。それが出来たらお前、それはもう・・・・・・モテモテだぞ?多分」

「マジでっ!?そうだったのか!??」

「そうだよ、じゃあ、もう1回始めからやり直すぞ」

「わ、わかったよ・・・・・・でへへ」

「よう、和也、Nice boat!」

「（よし！キタツ〜！）い〜〜ひゃっほーーーーう!!!!!!!!!!  
我ら愛しの言葉様、バンザイ!!!!!!!!!!バンザイ!!!!!!!!!!」

力いっぱい奇声を上げてまるで自由の女神のようなポーズをとる和也。アホだ。

「（あ・・・あれ？おかしいな？もいつちょ！）ひゃっほーーーー  
う!!!!!!!!!!我ら愛しの言葉様、バンザイ!!!!!!!!!!バンザイ  
!!!!!!!!!!」

し〜〜〜〜ん・・・・・・

講義ルームには俺達以外にそこそこの学生が居たので和也がいきなり大声で奇声を上げて皆、啞然としていた  
・・・・・・というよりも、若干引いていた。

「・・・・・・あ、あれ？ナンデスカ？この空気？（汗）」

「何言つてんだ、お前？朝からいきなり大声で奇声を上げやがつて・・・・・・気色悪いな。すがすがしい朝がぶち壊したよ、どうしてくれるんだ？てめえ」

「ここここここここらああああ〜〜〜〜?????たたたた  
た太一くんんん〜〜〜〜?????」

「何どもつてんだ、お前」

ヒソヒソ

「やあね〜〜〜〜あの人、重度のオタクかしら？イッチャってるわよ〜〜〜ちょ〜キモいんですけど？」（学生A子）

ヒソヒソ

「あーいう奴は無視しとけよ。アホが移るぞ」（学生B男）

ヒソヒソ

「でも、春になったらあーいう輩はどこにでも出現するわよね・・・」  
・・」（学生C子）

「お、おらおらあー！ー！ー！ー！てめえら見せモンじゃねえぞ！  
！！やんのか！ゴラア！」

和也が威嚇すると他の学生は何事も無かったかのように勉学に励んでいた。

「おい！太一！お前のせいで変な噂立ったらどーしてくれるんですかつ！？ちよつと！？」（汗）」

「お前の醜い本性が明るみになる事はいいいことじゃねえか」

「よくねえよ！！！！（汗）人の事だと思ってポジティブな言い方しやがって！！！！僕をただだけ貶めたら気が済むんですかねえ！？あんたは！？？」

「なはは、お前どんだけ」

「コラア！この場面でネタ方面に話を逸らすなあ！！！！（泣）」

「ったく……わかったよ……ほんのちよっぴり俺が悪い気がするかもしれないと誰かが思うから皆にフォローしてやるよ、ありがたく思えよ？クス」

「なんかものすごく僕が悪いみたいな言い方ですよね……（泣）」

とりあえず、教壇のところまで行き……

「おい！皆！スマン！アイツ、ちよつと病んでるんだ！！！！！！さっきの発言無かった事にしてくれ

！！！！！！！！！！」

「太一！てめえ！（汗）」

「うつひょー！おい！見ろよ！太一！あの女教授、噂どおりのナイスプロポーズだぜ！うへへへ……あのパイパイ視姦しているだけでご飯、何杯でもモリモリいけちゃうよな！」

「プロモーションな」

このアホ（和也）はもちろん真面目に講義なんざ受けるつもりハナから毛頭ない。今の時間帯の講義を受け持っているのはこの大学内で美人でスタイル抜群で有名な如月麗子きさらぎれいこという女教授だ。つまり・このアホ（和也）その女教授を狙ってここに来たと言う事だ。もち、このアホだけでなくこの中にもそれだけが目的で出ている連中もいるだろう。ちなみに俺は一応、最低限の勉強はしている。このアホ（和也）と一緒にするなよ？

「あれ？太一？難しい顔しちゃってどうしたの？一緒にあの女教授のパイパイ視姦しようぜ♪」

「嫌だよ・・・一人でやってろ」

「なんだよ・・・ノリ悪いな・・・まっ！いや！充分視姦し終えたから今度は脳内であの女教授揉みくちやし」とこゝうふふふ・・・♪でへへへへ・・・♪」

「・・・お前は毎日がパラダイスだな」

・・・ああ、そうか・・・今、俺の隣に居る奴は落ちるとこまで落ちた人間の見本だな。よく見習っておこう。まさしく落ち人間・・・うまくねえな。

「うへへへ・・・♪おふ！そんな！・・・先生！そんな背徳プレイまで・・・！？はあはあはあ！！！！！！ば・・・僕、耐えられないよ！ママ！うふっ！そんなとこまで舐めちゃうのぉ！？よし！僕も負けないぞぉ~~~~ぺろぺろぺろぺろぺろぺろ~~~~」

・・・すんげえキモイんですけど・・・

といつか・・・その赤らんだ幸せそうな顔がめっさム力つく・・・  
・  
・・・とりあえず、殴っておくか・・・

ガスッ！

「うぎゃピッ！！！！！！！」

ボタンッ！

・・・？いきなり和也が倒れた・・・？俺、まだ殴ってねえぞ・  
・・・？

「・・・さっきからキモイ吐息ばかり聞こえてくるとしたら・  
・・・コイツだったのね。ったく！まわりの迷惑も考えなさいよね  
！」

・・・ちょうど、和也の後ろの席にエミリが居座っていた。

「・・・よう、エミリ」

「・・・？太一？あんた・・・なんでこんなところに・・・  
・・・熱でもあんの？」

「・・・今、俺に対するお前の評価がよく分かったよ・・・  
」

「・・・じゃあ、なんであんな場違いな所に来てんのよ・・・」

「・・・一応、俺もこの学生なんだが」

「ふん・・・意外だわ・・・で？あんたの隣にいるバカまでここにいんのよ」

「ああ・・・コイツはあの女教授を目当てで来たただけだろ。こいつが勉強するわけねえだろ？だって、コイツ、三角関数のことを『サイン、コサイン、アタックナンバーワン！』とか言ってたんだぜ？」

「・・・よく、この大学に入れたわね・・・（汗）」

しかし・・・和也じゃねえがあの女教授、綺麗だよ・・・特にあの巨乳がすごいな・・・

「・・・太一・・・あんた鼻の下のびてるわよ・・・」

「・・・はっ！なに！？いや！！別にあの女教授のオッパイでっけーな！オイ！とか考えてねえぞ！！・・・あ  
あ」

「・・・太一、あんた私のじゃ足りないの・・・」

「・・・？お前は何を言ってるんだ・・・？」

「・・・・・・・・・・はあ、なんでもないわよ・・・・・・・・・・」

こんな感じで1日が過ぎていくのであった。

・・・・・・・・・・なんか、グダグダだな・・・・・・・・・・オイ・・・・・・・・・・



第13話『僕だつて女の子とイチャイチャしたいんだああああ！！！！！！（前

「・・・太一、僕、決心したよ・・・」

「なんだいきなり・・・ああ、そうか、ついに無理矢理、女を喰っちゃう決心がついたのか」

「そうそう、寝込みをガバァーっとな・・・って全然違っわっ！？」

「なんだ・・・つまらん」

こいつ（和也）が人の道を踏み外してくれるのもそれはそれで色々面白いのだが。

「頼むから真面目に聞いてくださいよ・・・実は僕・・・女の子好きなんだ」

「それは知ってる」

「でさ・・・モテたいんだよね・・・」

「無理だ、諦めろ」

「いきなり話の腰を折るなよっ！？話進まないだろ！？最後まで聞いてよ！？（汗）」

「しゃーねえな」



「ルックス、知力、忍耐力、運動神経抜群、なにより……面白い奴がモテると思うんだ」

「ふん……で？」

「まずは、ルックスで女の子をレロレロにしちゃうぜえ……！」

「メロメロな」

「そこで太一に協力して欲しいんだ……！どんな格好すれば女の子をロリロリに出来ると思う？」

「だからメロメロな、それ意味変わってるからな。って結局、俺に頼るのかよ……」

「頼むよ！太一！こんな事、頼れるの太一ぐらいしかいねえんだよ……！！」

「……はあ、たたくしかたねえな……」

「ひゃっほ……う……！！！！サンキュー……！！太一……！！で……！……？どんな格好すればいいと思う……？」

「そうだな……まず、上下に迷彩服を着て青少年のようなイメージを相手に増幅させるんだ……」

「なんか……青少年というよりもオタクっぽいよね……まあ、でもかつこよさげだしいいじゃん……いいじゃん」

「さらにだ……やっぱり男つてのは顔が命だかな……」

すぐには見せずにとりあえず、パンストを頭からかぶって顔を隠すんだ……」

「顔を隠す理由がなんか納得いかないっすけど……まあ、いつかっで？次はどうするんだ？」

「ああ……そして仕上げにやつぱいつどこから敵に襲われるかわかんないしな……いざというときに武器を持っていないと不安だよな……そこで限りなく本物に近いモデルガンを常に常時しておくんだ……そして女の子に銃口を向けて力強く……僕と……心中してください……」と告白するんだ……これで和也……お前はそれはもう……モテモテだぞ？多分」

「おおおおお！！！！！！それ、なんかすんげーかつくいいな！！！！よっし！！！！さっそく、試してみるよ！」

「ああ、健闘を祈る」

そして、30分後……

「……」

ランボーみたいな格好をした和也が俺の前に現れた。頭からパンストを被っているので顔がなんかキモイ。



「!!!!!!!!!!!!!!」

女学生が中庭で大声を上げたのでぞろぞろと野次馬が集まってきた・

・

「うおっ!?なんだ!?このイカレタ格好をした男は!?!」(男子学生A)

「こ・・・こいつ!?銃まで持つてるぞ!?ほ、本物か!?!」(男子学生B)

「か・・・かわいい女の子をこんなもので襲おうとするなんて・・・信じられない!?!」(女学生A)

「よっし!?!みんなでコイツをボコつちまおうぜ!?!?!?!」(男子学生C)

「・・・あれ?あれ?ちょっと?みなさん?(汗)」(和也)

・・・哀れ、斎藤和也君(享年20)、アーメン。

「お、お前は悪魔かつ!?!?!?!」(泣)」

「あれ?お前って死んだんじゃないっけ?」

「死んでねえよ!?!?!ちくしょう!?!?!?!もう少しで死ぬかと思

「つたよ！！！！！」

「おしかったな」

「おしかったって……何が！？（汗）」

「まあ……ルックスで勝負すんのは失敗だったな……で？  
どうする？」

「僕はあんたに頼んだのが失敗だと思ったよ……はあ……  
んじゃあ、次は知力で勝負だな……」

「お前には皆無だな」

「へへへ……太一……？バカにすんなよ？こう見えて僕……結構、頭いいんだぜ？」

「あつ、円形脱毛発見」

「へっ？嘘っ！？（汗）」

必死で頭をかきむしる和也。もち、嘘だが。

「じゃあ……俺が常識問題出してやるから口答で答えろ。いいな？」

「……はい」

結構気にしているようだ。

「Q1：今の総理大臣をフルネームで答えよ」

「へへっ！バカにしてんのかよ！加藤○さんに決まってるだろーがよ」

バカはお前だ。

「Q2：399+601〃????は？」

「そんなの1秒で答えられるぜ!!! 答えは……100だつ!!!!!!」

なんで足してんのに元の数値より低い答えになってんだよ。

「Q3：『メタボ』を略さずに言つと？」

「『メ』イド『た』んは『ボ』クに恋してる」

脳内妄想は脳内だけでしてろ。

「お前の頭脳はサル並な。いや……サル以下か」

「嘘でしょ！？（汗）」

「まあ・・・知力は全然これっぽっちも期待してなかったからいいじゃねえか。次は・・・忍耐力というわけだが・・・おつと、そろそろ時間がきたぜ。じゃあ、次回に持ち越しだ。多分」

「今、小声で多分って付けたよね！？（汗）」

とりあえず、後編に続く↓



第14話『僕だって女の子とイチャイチャしたいんだああああ！！！！！！！（後

【前回までのお話】

やばい……今更だが、車輪の国めっさいい……お暇ならやってみ？いや、マジで。

「じゃあ、次は忍耐力で女の子をげっちゅしちゃうぜ！！！！！！」

「お前に次は無い」

「人がこれからやる気出そうとしてんのに挫かせるような事言わないでくれませんかっ！？（汗）」

「……で？次は何すんだ？」

「もち、太一♪教えてよ♪」

「……本当にてめえはダメ人間だな……」

まあ、今更こいつにそれを諭すなんてめんどくせえことなんぞこれっぽちもするつもりもないが。

「……しゃあねえな……忍耐力だな……  
……よし、思いついたぞ」

「おっ♪どんなの？どんなの？」

「お前がエミリに抱きつく」

「僕、死ぬよっ！？（汗）」

「まあ、待て、和也。当然そこでお前は殴られるわけだ。そこで  
前の異常な回復能力が役立つというわけだ・・・」

「・・・意味がわかんないんですけど？あと、軽くバカにされた  
感が否めないんですけど・・・？（汗）」

「お前は何事も無く起き上がり笑いながらこう言うんだ・・・  
『効かないねえ・・・』とな」

「・・・お、おお・・・なんかかつこいいな・・・」

「そして当然、カツとなったエミリはさらにお前に攻撃を加えるだ  
ろう・・・だが回復能力の高いお前は  
何度も立ち上がりこう言うんだ・・・『効かないねえ・・・  
全く効かないねえ・・・そして・

・・・この君から受けた痛みもいつしか快感へと変わるんだ・・・  
・あ、あぶぶ！あひゃん！い・・・痛い！痛み気持ちいい！いい  
！そこ！快感！あへあ！』・・・そしていつしかエミリは和也  
の忍耐力に惚れて、頬をそれはあの日の夕日のように染めるんだ・・・  
・・・」

「お・・・おおおおお！！！！！！ま、まさに青春だねえ！！  
！！！！うん！！！！やってみるよ！それ！」

俺は今のお前を見ているだけで若き青春を謳歌できるよ。

「よし、逝って来い」

「うん！言ってくるよぉ！うふふ・・・」

「やぁ♪エミりん♪元気い？」

「うふふ」

バキッ！

「うびよっ！？」

「出会った瞬間殴られましたが・・・（汗）」

「お前の挨拶が悪りいんだよ」

「・・・じゃあ、どんな挨拶がいいんだよ？」

「ああ・・・『おねえちゃん、いくらや？』って言え」

「ああ、わかったよ。」

「おねえちゃん、いくらや？」

バキッドガッ！めきッ！

「うふおっぷ！……！！！」

「……さっきよりめったに殴られましたが……（泣）」

「お前の顔、面白い事になってんのな。げらげら」

「お前のせいだろう！？ていうかあんた本当に最低ですね！？（泣）」

「いやあ、お前には負けるさ、完敗」

「こんなに勝っても全然嬉しくないんですけど！？（汗）」

「いやあ……スワンスワン。そうだな……もうお前いっその事、いきなり抱きつけ、挨拶いらん」

「それが出来たら苦労しませんけどね……」

[illegible]

「ああ！そうか！その手があつたか！………つてな  
んかよく考えたら僕たち、すごい最低な事考えてますよねえ……  
……（汗）」

「気にすんな、お前は存在がすでに最低だ」

「言いますねっ！？あんた！？……ってあんたも最低だあああああ  
あああああ！！！！！！！！！！」

「いやあ、お前には負けるさ、これからも頑張れ和也」

「そんな事、応援しないで下さいっ!!!（泣）」

「忍耐力はだめっすねえ……じゃあ、次は……」

「いや、もう正直めんどくせえからお家帰っていい？」

「これからだよっ！？ていうか、ここまできたんなら最後まで付き

合つてよ!？」

「イヤダ、ボク、オウチカエリタイ」

「なんでそこで片言になつてゐるんだよ!？た、頼むよ!!!太一!」

ぐいぐいつ!!!

和也は俺を逃がさないように抱きついてくる……

「う……うお!？や、やめろっ!!!顔が近い!!!キモイ!!  
!汚い!!!臭い!!!」

「こ……こ……こうなつたら……い……意地でも逃がしま  
せんからね!？」

「コラ!やめんか!アホツ!？」

な……なんでコイツはこんなところでいいところをやたら絡んで  
くるんだっ!？(泣)

や……やばい……

こ……こんなところ誰かに見られたら……

「……………たいちゃん?」

……………ほらね。海ちゃんに会つちやった。

「「「「「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

．．．．．冷え切った沈黙．．．．．

「．．．．．たいちゃん、お幸せに．．．．．っ！（／／／）」

「いやいやいやいやいっ！！！！（汗）なに壮大な勘違いしてんの！？海ちゃん！？俺、そっちの気はないよ！？．．．．．って早っ！？消えた！？」

あああ．．．．．あああああ．．．．．あああああああああ．．．．．

．．．．．やつちまったよ．．．．．

もちのロン、その後、和也をボコったのは言うまでも無い。



第15話『ロリっ子ママって何気に多いよね？いや、二次元だよ？』

「太一！マジ、今回のブツはやばいんだって！マジやばいって！コレ！やばすぎるって！略してマジヤバ！？って奴だぜ」げへへへへ・・・」

「やばいのはお前の顔だ」

講義が終わり家に帰ろうとしたら和也がなんか興奮しながらいきなり『AV見ようぜ！！』とか言い出した。そしてなぜか俺の家で鑑賞することに・・・

「つーか、お前マジ可奈に見つかったら殺すからな」

「へへへ」大丈夫だって」もし、抜いちゃってるシーン見られても『アッー！俺のミルクがこぼれちゃったぜ！なはははは』とか言っつて誤魔化せば済むって」

「嫌な誤魔化し方だな・・・」

そもそも下半身を露出しちゃってる時点で誤魔化しようが無いと思うが。

「あ~~~~僕、最近溜まっちゃってるから今日は久しぶりなんだよね~~~~あ~~~~楽しみ」

「つーか、俺の家でそのソロ活動はやめろな」

「いいじゃん」いいじゃん」太一も特別に仲間に入れてやるよ」ソ



バキッ！

「あいたっ！あ、挨拶しただろ！？」

「床を踏むな」

「無茶言っなよっ！？（汗）」

「お前の残り香を残すなんてめちゃくちゃチョー不快だからな」

「だからあんた最近冗談きつくなってますよねっ！？（汗）」

そして部屋のリビングに入ると……

「あゝお兄ちゃん、お帰り〜」

「たいちゃん、お帰り〜」

「……………」

妹の可奈と……ここにいるはずの無い人物がくつろいでいた。

「えへへ、可奈ちゃん、ただいま」

ドガスッ！！！！

「へふうふ！？ま、またかよ！？普通に挨拶しただけじゃん！？（汗）」

・・・なんか俺、和也を殴るのが段々反射的になってきたな・・・

「てめえ・・・どうしてくれんだ？お前をどつきすぎて手がしびれてきたじゃねえか」

「あんたが僕を殴らなきゃいい話だろっ！？（泣）」

とりあえず隣でやかましく騒ぐ和也は放って置くとしてだ・・・

「・・・で？なんであんたがここにいるんだ？」

リビングで妹と一緒にくつろいでいる人物に問いかける。

「何言ってるのよ」そんなのあたしの家だからに決まってるじゃん」

いい歳したおばはんが語尾に『じゃん』とかつけるなよ・・・

「・・・あれ？太一・・・？このロリたん誰？」

「ロリたんって言うな」

確かに容姿は小学・・・いや中学生くらいに見える。髪形は金色のロングでその歳に不相応なりポンを付けている。そして身長は・・・妹の可奈と同じくらい・・・いや、下手したら可奈より小さい

かも・・・・・・・・とまあ、紹介はこのくらいにしておいてと・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・あ、やべえ。

「・・・・・・・・？おい、太一？この子誰だよ・・・・・・・・って・・・・・・・・へ？」

ぐいつ

「あ・・・・・・・・あれ？ちよつと・・・・・・・・！？」

ばっ！どすん！！！！

「へ？へ？へ！？あ・・・・・・・・あの！？ちよつと！？ちよつとお！？」

がつ・・・・・・・・ギリリリリリ、メリメリメリ・・・・・・・・（↑骨が軋む音）

「ぐ・・・・・・・・ぐぎゃああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

・・・・・・・・あゝあ・・・・・・・・また、やっちまったよ・・・・・・・・まあ、和也だからどうでもいいけど。

メリメリメリ・・・・・・・・

ついでに今、和也の身に何が起こっているのかというと・・・・・・・・

いきなり服の襟元を捕まれてその勢いでリビングの床に叩きつけられ……そしてなぜか寝技をかけられている……まあ、その寝技をかけている奴がだな……

「おい、もうその辺にしておけ『お袋』。そのアホの顔がマジで青白いメロンみたいになってるからな」

「……………はっ！？あたし一体……………あれれ？  
太ちゃん？この子誰？」

「マジその癖いい加減直せよ……………」

お袋から解放された和也はゆっくりと起き上がった……………こいつ、回復力だけはすごいな……………

「な……………なんなんすか……………？これ……………？なんで僕がこんな目に……………（泣）」

「ああ……………信じがたいだろうがお前の目の前にいる子供は俺のお袋だよ。そして、初対面の人間にはなぜか本能的に寝技をかけるといふ恐ろしい特技を持っている」

「……………あんたの家族は変なのばつかですね……………（泣）」

「……………こいつに言われるのはなんか癪だが……………納得せざるをおえない……………」

「たいちゃ〜ん？この子誰〜？太ちゃんのお友達？」

「違う、俺の非常食だ」

「やっぱりあんたが1番変だよっ!?(泣)」

「ふん……そうなの」

「普通に信じたっ!?(汗)やっぱりコノヒト変だよっ!?(泣)」

「お兄ちゃん……でも和也さんってなんか酸っぱそうだから非常食には向いてないと思うよ?」

「そして何気に本気で言ってる可奈ちゃんが1番変というか……  
・!?!?僕の心がズタズタに!?(泣)」

なんか最近、和也に対して風当たりが強くなったな、可奈。まあ、兄としてはハッピーだけど。

「……で?なんでお袋がこの家に?」

「だからここに我が家の家だからに決まってるモン」

「だから、モンとかそういう歳に不相応な言葉遣いをするなど……  
・」

「……あ、やべ、口に出してしまった。」



」

「ああ……って、まさか本当にそれだけで日本に帰ってきたのか？（汗）」

「うん」

「……思いっきり殴っていいか？」

「やだピヨン」

「……」

マジでこんなのが俺の母親だとか……気が滅入るよな……

「え……？お母さん……もう、海外行っちゃうの……」  
「？」

泣きそうな顔でお袋を見つめる可奈……まあ、お袋に会うのも5年ぶりだかな……

「ごめんね……可奈ちゃん……ママまだ大事なお仕事が残ってるから……それにパパも今頑張っているからね……大丈夫よ」また近いうちに帰ってくるからそれまでお兄ちゃんとお家で待っておくのよ」

俺はお袋と親父ががどんな仕事を海外でしているのかは知らない……だが、なんとなく普通の仕事ではない事は薄々気付いていた。

「ふ、ふえええ………」

泣いている可奈をそっと抱きしめるお袋………うむ、こつ見るとなかなか絵になっているな。

「あの………太一君？」

「なんだ、非常食」

「もう、そのあだ名やめてください！！（泣）」

「わーったよ………で？なんだよ？非常食？」

「あんた全然人の話聞いてないですね！？（泣）」

「で？なんだよ？」

「………今回、僕の存在価値は？」

「ぶつちゃけるとないな」

「普通にぶつちゃけないでくれませんかねえ！？（泣）」



第16話『メス>犬>……（越えられない壁）……>もやし>和也>消しゴム』

「よう！太一！今日は我が家の家族を連れてきたぜ！！！」

「バウ」

大学の中庭でカツサンドを頬張っているとなぜか和也が犬を連れてやって来た。

「大学に犬を連れてくるなよ……」

「へへへ♪どうだい？太一？僕に似てなんか貫禄つか、ダンディでしょ？」

「バウ」

「……………」

……………いや、ブルドッグだしな……………むしろ、ブサ……………おっと、お犬様に失礼だな。

「へへへ♪まあ、見ててよ♪こいつは僕に従順なんだよ♪じゃあ、まずは……………サンダーバード式号！お手！」

サンダーバード式号……………無駄にカッコいい名前だしな。

「……………」

和也が命令してもピクリとも反応しない……………

「おい、全然反応してないぞコイツ」

「あ、あれ？（汗）お、おかしいなあ……………ああ！そうか！きつと今の僕の声が聞こえなかったただだよ！うん！うん！そりゃあ、仕方ないよね！うん！じゃあ、もう一回試してみようか！！！トンペイ！！！」

「さっきと名前変わってるからな」

「じゃあ、行くよ」はい！お手！」

「……………」

さっきより大きな声で命令するも全然反応しないサンダーバード式号もといトンペイ。

「おい、やっぱり全然反応しねえぞコイツ」

「そ、そんなはずは……………（汗）おい？ほ？ら？お手だよ？」

和也はさらに犬に近づき手を差し伸べるが……………

「ぺっ！」

「……………（汗）」

「完全に舐められてるわな」

「こ、このバカ犬……………ち、違うよ！太ー！ポン太は前足が筋肉痛

で動かせないんだよ！だ、だからお座りならできるよ！うん！じゃあ、お座りやってみようか！キバヤシ！」

「さつき普通にお前に引かれて歩いてたじゃねえか。あと、犬の名前ひとつに統一しろな」

「ほら！お座りだよ！ポン助！」

「……………」

ぷりぷり

「……………（汗）」

「おい、ウンコし始めたぞコイツ」

「こ、この……………人間様をバカにしゃがって……………いくら温厚な僕でも、もう玉金袋の緒が切れたね……………もう許しませんからね……………！！！！う、うらうらあ……………！！！！死ねやバカ犬……………」

「堪忍袋の緒な」

犬相手に何本気で切れてんだコイツ。

「お犬さんをいじめちゃだめですう……………！！！」

メキッ！！！！！！！

「あげぷう！！！！！！」

バタ…………

いきなり後ろから誰かにフライパンで叩かれ、倒れた和也……………って

「あれ？美由ちゃん？」

「はあ……………はあ……………よかったですう、お犬さん大丈夫ですかあ？」

「バウ……………」

シカトですか美由ちゃん……………ってこのバカ犬、なんかサカッてねえか？

「お……………よしよしですう……………」あはっ！そんなとこなめちゃダメですよ……………あひ！こ、コラ……………だめですよ……………」

「バフ…バフ…バフ…バフ…」

ペロペロペロペロペロペロペロペロペロ

……………なんか無性に腹が立つんだが……………ある意味、飼い主になるわな、こーいうところだけは。

そろそろ美由ちゃんにちゃんと声掛けるか……………

「美由ちゃん」

「……………？あゝ太一さん！こんにちわ！」

「ああ……………こんにちわ。でさあ……………俺、お昼カツサンドだけだったんだよな……………あゝ腹減った」

「あ、それなら私のお弁当食べます？私、おなか空いてないので食べてもらえると嬉しいです」

「いや……………俺のためにそんな……………それより今、目の前にいい食材みつけたんだよな……………」

美由ちゃんが抱えている生き物をじつと見つめる。

「あ、あの何を見ているんですか……………？」

「いや……………気にしないでくれ……………」

さらにじつとその生き物を見つめてみる。

「……………ま、まさか……………お、お犬さんをた……………食べ……………」

「犬鍋ってうまいのかね？美由ちゃん？」

「……………！だ、ダメ！ダメですう……………！お……………お犬さんを食べちゃだめですうつうつ……………！！……………」

「はははっ！冗談だよ！美……………」

「食べちゃ…食べちゃ…食べちゃイヤですっっっっっっっっっっ！  
！！！！！！！！！！」

「あ、あの……？美由さ……」

「いやいやいやいやあああああ……！！！！！」  
 「！食べちゃいやですううううううう……………」

「何、お姉ちゃん泣かしてんのよオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

バツコーン!!!!!!!!!!!!!!

「ぐはっ！！！！！！」

い、いてえ！！！！！！今、背中にモロ、ドロップキック喰らったぞ  
！？

「お姉ちゃんを泣かしたらタダでは済まないわよ！？分かった！？」

「なんだ……美夜ちゃんか……イテテ、腰打った」

「あ……太一さん！！だ、大丈夫ですか！？」

「あ、大丈夫大丈夫。折れてないから」

しかし、今の当たり所が悪かったら折れてたぞ……………きつと。

「こら！美夜ちゃん~~~~！？太一さんにちゃんと謝りなさい！！」

「え、ええ！？今のはあきらかにコイツが悪いでしょ！？だって…………お姉ちゃんを…………その…………（／／／）」

「俺は軽い冗談を言っただけなんだが」

「う、嘘！お姉ちゃんをく、……………喰うとか……………その……………（／／／）」

「あれ？俺、そんな事言ったっけ？」

「い、言ったわよ！（／／／）あ、あわよくば……………お、お姉ちゃんの脱ぎたての体操服を使ってい、色々したり……………い、今だって！お姉ちゃんの食べ残しを嬉しそうに奇声を上げながら貪るように舐めまわすようにバクバク食べようとしてたでしょ！？」

いや……………後半、すんげえ脚色されてねえか？前半なんてただの変態的な妄想だし……………

「そんな事考えてないし……………っていうか何気に美夜ちゃんってエロイよね？」

「~~~~~（／／／）そ、そんなことない！！！！！！」

……………恥ずかしがっている美夜ちゃんかわいいな……………初々しい……………



え！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

[illegible]

「……………ねえ？美羽ちゃん……………もしかして……………」

「美夜ちゃんは大のお犬さんが苦手ですう……………こんなにお犬さん  
かわいいのに……………」

ブルドッグを純粋に『かわいい』って思う人なんかほとんどいないと思うんだが…… ああ、チワワは可愛いけどな

一応、覚えとこう。これからの生活のために色々と  
なるほど……

こうして今日もダラダラと時間が過ぎていくのであった……

## 第17話『リアル人生ゲーム(?)』

「なあ？太一、人生ゲームしようぜ」

「なんで」

「さあ？作者からの指令らしいぜ」

「指令ってなんだよ……………」

「まあ、いいじゃん。人数も結構いい感じだし。パンティゲーム楽しむには持ってこいじゃん」

「パンティゲームじゃなくてパーティゲームな」

俺の家には海ちゃん、可奈、エミリ、そして何故か葉月姉妹まで勢揃いしていた。

「？お兄ちゃん、人生ゲームって何？」

「人生ゲームってのはだな……………今の和也の生き方に近いな」

「ちょっと！？それどういう意味っすか！？（汗）」

「あゝなる」

「納得されてる！？」

「太ちゃん」

「ん？」

そして、海ちゃんが小声で俺を呼ぶ……………か、顔が近いよ？（汗）

「今の……『あゝなる』って『』を失くすとアナ……………」

「ストップ、海ちゃん。そこまでにしようね（汗）」

「わ、私はべ、別にあんたに会いたくて来たんじゃないんだからね  
！……ふ、ふん……！」（エミリ）

……………典型的なツンデレ口調だな、オイ。

「お、お姉ちゃ……ん（汗）な、なんでこんな変態野郎の家に来  
なくちゃならないの……」（汗）」

「いいじゃないですか……」どうせ、家に居ても美夜ちゃんは  
下着姿でゴロゴロしてるだけなんですから……今日は楽しみま  
しょう」

「きゃあああああああ……！！！！！！……な、ななななん  
て事言うのよ……！！！！！！お姉ちゃん……！！！！！！  
！（／／／／／）」

……………やばい、今、ちよつち想像してしまった（／／／）

「でも、何も賭けずに単に人生ゲームってのもな……………」

「勝者は敗者のオッパイを揉むでいいじゃん」（和也）

バキッボキッパキッ！

「……………すいません（泣）」

「敗者は勝者に一週間お昼ご飯おごるってのはどうかしら？」

エミリが提案する。

「……………まあ、いいんじゃないの？」

こうして人生ゲームが始まった。

「へへ♪じゃあ、僕からサイコロ振ってもいいよな？」

「好きにしろ」

「へへ……………じゃあ、それ！！！」

和也が1番最初にサイコロを振った。

「目は……………『6』？へへ♪ラッキー♪幸先いいじゃん♪」

……………こいつの幸せな顔を見ていると殺意が沸いてくるのはなぜだろっ？

「1、2、3、4、5、6と……ナニナニ？……『人生やり直し』……ってちよつと！！！！なんですか！？コレ！？（汗）」

「字の通りだろ」

「普通、『1回休み』とか『スタートに戻る』とかそういう系がくるんじゃないですか！？おかしいだろ！？こんな目！？現実<sup>リアル</sup>に人生やり直せとか！！！！ふざけんなああああ！！！！！！」

「いいじゃねえか、一遍リセットしてみろよ、お前の人生」

「それ、遠まわしに死ねって意味ですよね！？それ！？（汗）」

「じゃあ、次は私が振るわ」

ギヤーギヤーと一人煩い和也を放っておいて次はエミリがサイコロを振る。

「それっ！！！！！！」

ビュン！

ボスッ

「Ouch!」

エミリが力いっぱい投げたサイコロは見事<sup>和也</sup>のわき腹に命中する。気合入れすぎだろ……

「…………『4』ね。1、2、3、4…………と。えつと…………『恥ず

かしい出来事を1つ暴露しなさい』………って！………なによ………！  
コレ………！」

ニヤリ、ハズレを引いたな。

「だから字の通りだっつーの」

「い、嫌よ………！（ノノノ）なんでそんな事………！」

「じゃあ、負けっでことでいいんだな？」

「うっ………（汗）」

「………エミリさん、小学校の頃、夜中トイレに行くのが怖くて布団の中で震えていたらオネシヨしたんですね？」

「な！なんで海がそんな事知ってんのよ！？（汗）」

「………いえ、なんとなくありそうかな………と」

「え………？」

「なはははは、自爆してやんの………！」

キッ

おお、睨まれた。怖い怖い………

「じゃあ、次は私が振りますね………」

次は美由ちゃんだ。

「……えい！ですう！！！」

ΠΟΠ...

「ふえ〜ん!」  
「1」ですう〜!〜!〜!  
「……な、  
なんでですか〜これ〜?〜?〜?」

「どんな目が出たの？」

「盲腸で入院、3回休み」ですう〜〜〜」

……普通だ。

「じゃあ、次は私ね」

美夜ちゃん、サイコロを取り……

「はあ ああああ！！！！！！！！」

ビュン！

ビ  
ス  
ッ  
！

「あぶお！！！！！」

美夜ちゃんが投げたサイコロは見事のびている和也の眉間にクリーンヒット。だから、お前ら気合入れすぎ。



…美由ちゃんはなんか……………1番かわいそうな気がする」

美由ちゃんを見ると顔を真っ赤に染めて涙目になりながら『ふええええ（／＼／＼）』とか可愛い声を上げて自分の格好を隠すようにしている。

「で、でもよう？太一？な、なんか……………僕のがボークピッツからフランクフルトになっていくんすけど？はあはあ……………（／＼／＼）」

「んな生々しい表現をするな気持ち悪い」

「ちよつと！……早くサイコロ振りなさいよ！……次、あんたの番よ！……！……」

「ひい！は、はい！やらせていただくでござる！……！」

エミリ大分気が立っているな……………

「よ、よし……………僕は遅れ気味だからまた『6』でも狙おうかな！……！……！」

現在、コマの位置的には可奈、海ちゃん、離れてエミリ、美夜ちゃん、そしてさらに離れて俺、美由ちゃん、そしてベリは和也……………  
和也、お前、仮想空間内でもこういう立場なのかよ……………

「……………また『1』っす……………（泣）」

最初の『6』の目以外、全て『1』の目を出すって……………ある意味、勝つよりすごいぞ。

「…………『プリキュ。のOP曲を熱唱せよ』…………ナンデスカコレ？（汗）」

もはや人生ゲームですらないな。

「…………まあ、歌いますけど」

…………歌えるのか。

そして軽快に和也は『プリッキュ。♪プリッキュ。♪』と歌い出す。微妙ににやけながら歌うものだから、女性陣から『キモ……』とか言われていた。哀れな奴だ。

結局最終的には海ちゃんが勝ち、ビリ和也。ちなみに明け方まで勝負は続いた…………

## 最終話『太一君は恋を求める』

あれから半年経ち……そして今は桜咲き乱れる4月。

俺とアホウ（和也）は奇跡的に留年を免れ、三年生に進級できた。

あれからというものの俺達の関係（主人と下僕）は変わっていない。

ああ、海ちゃんやエミリ、葉月姉妹の関係も変わっていないわな。

……そして、未だに彼女もいない。切ねえ……と、まあそれは置いて。

そして今日は大学の入学式。俺と和也は中庭のベンチに居座っている。

「おい……和也」

「ん？どうしたよ？太一？おっぱいが恋しくなったか？」

「ちげえよ……なんで休日なのに大学に来なきゃあならねえんだよ」

うちの大学の入学式は在学生は出席する必要ない。なので在学生にとっては今日は休日になっている。

「へへ♪そんなもん決まってるじゃん」

「はあ？」

「新入生のかわい子ちゃんをナンパするために決まってるじゃん」

「俺、帰っていいか？」

「ま、ま、いいじゃん♪もしかしたら新入生の中にしゃこ。ん似の子がいるかもしれないぜえ？へへ♪」

「しゃこ。んじゃなくてしょこ。んな」

「へへ、お♪見るよ！太一！きたぞ！プリチーなお・ん・な・の・こ♪あんさんも好きっしょ♪？」

「プリチーとか言っな」

「へーイ♪その彼女達！かぁいいねえ♪僕たちと一緒にお茶しない！？おごってあげるからさ♪」

早くも仲良くなったのか2人で歩きながら喋っている女の子に声を掛ける和也。おごる金なんざねえくせに…

「…はい？あの？ここの在学生の方ですか？」

メガネをかけて清楚な雰囲気の子が和也に問いかける。こんなアホに敬語を使うなんて……なんて健気な子なんだ。

「ううん♪僕達、ここの在学生！ちなみに僕はこの大学のマスコミ系トキヤラ的な存在だから皆から崇め奉られているんだよね♪あ、あっちにいる人は無愛想な顔してんだけど僕の手下みたいな人だから！ヨロシクね♪」

嘘をつけ……

「あ、こちらこそよろしくお願いします、先輩」

「よろしく願います先輩」

2人の女の子は和也に丁寧な挨拶をする……そんな奴にんなことしなくてもいいのに……

「うんうん、よろしくね」ところで君達もう入学式終わったんだよね？これから僕たちとカラオケにしゃれ込まない？入学祝いという事でにやんにやん騒ごうよ！」

和也から下心丸出しな発言が飛び出した。

「え……えつと……？（汗）」

「……ど、どうする？那美ちゃん？」

困った顔を浮かべる女の子達。そろそろ止めるか……

「君達、嫌なら嫌って言うていいんだぞ？」

「ちょっと！？何言ってるんですか！？あんた！？（汗）」

和也が焦った顔を浮かべる。しかし、構わず続ける俺。

「カラオケとか個室に連れ込まれたら汚されるかもしれねえぞ？」

「あぎゃあああああ！！！！！！何言ってるんですかあああああ！！！！

「！！！！あんたあ ああ ああ ああ！！！！！！」

「そ…そうなんですか？」

「那美ちゃん……止めといた方がいいんじゃない？……」

「しないしない……（汗）そんなことしないよ……大丈夫、や、優しくするから……（汗）」

「君達、こいつ優しくナニかをするつもりらしいぞ」

「あんたもう黙ってくれませんかねえ！？」（汗）

「ああ……ちなみにもういないぞ」

「……へ？　……っ  
てあああああああ！  
！！！！！！！！！」

結局、あれから数人の新入生に声を掛けた和也だがことごとく失敗に終わる。

「泣」……

「残念だったな。まあ、これはなんとか運の尽きというやつだな、そういう星の下で生まれたと思えよ、な？」

「全部あんたのせいでしょ!?(泣) くそう……悪魔みたいな奴だ」

「よせよ、照れるじゃねえか」

「別に褒めてませんからね!？」

「俺にとっては最大の褒め言葉だ」

「……はあ、もういいっす」

「ま、頑張れYO」

「すんげえム力つくんですけど……」

おまけ

「……で、結局俺の家が溜まり場となるんだな」

「ああ……やっぱ、この部屋の独特の匂い……いいねえ……つい依存してしまいそうだよ」

「気持ち悪いからな」

「……で？何する？太一？」

「何もするな」

「……へいへい」

「……………」

「……………」

「…あ、息もするなって意味だからな」

「それ死ねってことかよ！！！！！！（汗）」

変わらぬ日々を過ごす俺達……けど、そこに『恋』がある限り俺は  
求め続けるだろう。

何をつて？そりゃあ……

人生のパートナーという名の彼女を。これからずっと……な。

太一君は恋を求める fin

**最終話『太一君は恋を求める』（後書き）**

最後まで読んでくださった方々、本当にありがとうございました。  
感想等ありましたらよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2021d/>

---

太一君は恋を求める

2010年11月8日08時28分発行